

# アラン

## 精神と情熱とに 関する八十一章 (上)

高村昌憲訳

# アラン

精神と情熱とに関する八十一章  
(上)

高村 昌憲 訳

## 序文

---

私の本の読者の一部の人々は、今まで公表した数々の短い章に順序も分類も無いので、屢々残念に思っていた様です。私には近年の不幸と偶然によって、強制的に与えられた暇な時間がありましたので、順序が内容を台無しにしないかどうかを試してみたくになりました。更に、もしも私が知っていたことしか言わないならば、最も不毛な問題にも近付かない理由は無いと理解しましたので、たまたま一種の〈哲学概論〉の様な本を書いた次第です。しかし、その様な表題では余りに約束事が多いと思われまじ、沢山の本を台無しにする完全にするという不幸な観念によって私に習熟したものを遠くへ追いやることを特に私は恐れますので、少しも気取りの無い表題をそれ故に選びました。しかしながら、これからお読みになるものには理論哲学や実践哲学の重要な部分が抜けていると私は思いませんが、論争は別です。それは誰にも教えたりしません。勿論、もしも哲学を職業とする人の価値判断がこの本に下されたなら、その唯一の思想は私がこの本を書くことで発見した生き生きとした喜びを台無しにすることでしょう。喜びが無くて珍しくなったこの時代にあって、本を創るにはそれだけで十分な理由になると私には思われました。

一九一六年七月十九日

最も一般的に広まっている意味において理解される〈哲学〉という言葉は、概念の本質を含んでいます。それは一人ひとりの目から見ると、欲望や野心や恐怖や後悔を調整するためのものと見做す善悪に関する正確な評価です。この評価には事物の認識も含まれます。例えば可笑しい迷信とか意味の無い前兆を打ち破ることが重要であるかどうかです。これには情熱そのものの認識と、それらの情熱を鎮める技術も含まれます。この哲学的知識の素描には欠けているものは何もありません。ご存知の様に、それは何時も倫理上の教義とか道德上の教義を狙っていますし、一人ひとりの判断力に基づくものでもあり、賢人たちによる忠告以外の他に助けはありません。哲学者が多くを知っていることは含みません。というのも困難と感じる正しい感情と私たちが知らないことを正確に調査することは、知恵にとっての一つの方法になり得るからです。しかし、そのことは哲学者が知っていることを自分自身の努力ではっきりすることも含みます。知恵の力はどんなものでも死や病気や夢想や失望に対する堅固な判断力の中にあります。この哲学の概念は誰もが良く知っていますし、それで十分です。

もしも、その概念を広げて行ったなら、広大で密生した茂みの野原が目に見えます。それは情熱の認識であり、それらの原因でもあります。しかもそれらの原因には二種類のものがあります。一つには幾つかの機械的な原因がありますが、それらの正確な認識は、これからお分かりになる様に、既に自然から私たちを解放するまでのものですが、多くのことを可能にしません。もう一つには幾つかの道德秩序を原因とするものがあります。それらには解釈の間違いがあります。例えば私が実際に物音を聞くと、まるでそれは家の中に泥棒がいると思う様なことです。そして、これらの間違った観念は事物や人間の肉体そのものへの、より正確な認識によってしか立ち直ることが出来ませんし、その認識は事物に対して絶えず作用します。そして殆ど何時も私たちの承諾にはお構いなしです。例えば私の心臓が脈打ったり、両手が震えたりする様な時と同じです。

そこからお分かりの様に、もしも哲学が厳密に倫理学であったなら、そのこと自体によって一種の普遍的な認識になりますが、私たちの情熱とか少なくとも好奇心を満足させるための対象と見做す数々の認識の目標からは時々区別されます。どんな認識でも英知を導く限り、それは哲学者にとって正しいものです。しかし、実際の対象は常に精神の治安には良いものです。この観点からは自然と認識を批判するための考えに移ります。何故なら私たちの間違いそのものの最初の注意力は、情熱によっての認識が曖昧であることを分からせてくれるからです。それは真偽の確かめられない認識が限りなく広がって、私たちにとっては対象が無いのも同じです。そして、それらの認識には二つの源泉があります。一つは数々の言葉の全ての結合に抵抗することなく適合する言語があります。もう一つは神々や運命の力で一杯の世界を作り出す情熱があります。そこに見出すのは魔法の手助けとそれらの前兆です。ここには批判すべきことや基礎を築くべきことを、つまり全ての神々の母である人間の本質としての知恵を、宗教への批判から引き出さなければならぬと誰もが理解しています。この批判的活動を思索と呼んでいます。それはあらゆる認識をより一層賢明になるのを目指して、何時もそれらの認識を形づくる人に戻すことになります。

哲学の概念を形づくるための真の方法は、哲学者たちがいたということを思考することにあります。その弟子は、王たちと幸福と美德と罪悪、そして神々そのものや、結局は全てのものを裁いたこれらの奇妙な人々の面貌を自分自身で描かなければならないでしょう。もっと注目すべきことは、これらの人々が常に感嘆して見られていて、屢々王たち自身から尊敬されていたことです。エジプトのヨセフ（1）はそれらの思いを説明しました。かくして彼は最初の大臣になりました。ここでは情熱を解明したり、恐怖や疑いや後悔や、ついには王の裡に隠れているもの全てを見抜いたりする術を驚嘆して下さい。ヨセフのこの例に倣って、あらゆる時代に、そしてあらゆる文明に哲学者たちがいたことが理解されるでしょう。彼らは穏健な人々であり、良き忠告者であり、従って魂の医者たちでした。占星術師たちは暴君たちの周りでも大きな力があり、恐らく大変に術策を弄した哲学者たちでもありました。彼らは星々を結び合わせて未来を見る振りをしていましたし、実際は暴君の情熱や政治家の高度な観点に従って未来を言い当てていました。これは常に思っていた以上に鋭い見方に従って信じられていたのが哲学者たちの運命でした。この時の彼らは良識に従って判断していたのです。それ故に今はティベリウス皇帝の占星術師の肖像画を描いて下さい。そしてティベリウスのものがやはり目的だったのです。

この緻密な動きにおいては、両方からの情熱を描いて下さい。シラーの戯曲『ヴァレンシュタイン』の第一場を利用して下さい。そして、シラーやゲーテが文学の中で言っていることも利用して下さい。あなたはここで、力と怒りと金銭欲が全てを生む恐るべき野营地の中で、人間の現実の真っ只中に居ります。それは文明の一つの形です。もしも、あなたがそこで周りにいる人物とあなたの本来の情操の感情を認めたなら、あなたは既に偉大な進歩を遂げているでしょう。しかし、夢見ることは少しも重要ではありません。書かなければなりませんし、それが美しいのです。もしも、それが人間性のあるものなら、美しいものになるでしょう。この方向の中で勇敢に前進させて下さい。それが真の哲学のものになります。もしも、あなたがそのことに疑問を持ったなら、何処でも構わないので単にプラトンの本を開いて下さい。そして、プラトンが難しいという観念を、直ぐに追い払って下さい。私がここでプラトンを推薦するのは、裏に何も隠していないし、難しくもなく、議論すべきことも無いからです。その調子で一歩進んで下さい。それは文化にとっても決定的なものになります。

情熱やそれらの興奮から、年齢を取るとそれらを冷ますと同時に少しは訂正するより一層冷静な点検までをやっとの思いで遡ることをせずに、小論がいわば終わりから開始していること、そして様々な意見の規律から品行の規律までを行っていることに、読者は驚くことはないでしょう。（完）

（1）ヨセフは、聖書にてエジプト王の夢を解き明かして大臣となり、ヤコブ一族のエジプト移住を助けた。

第一部 感覚による認識について

## 第一章 感覚による認識の予想について

---

誰もが持っている素朴な観念とは、私たちが何も変えられない対象として現れて、その痕跡を受取るしかない風景ということです。有りもしない対象によって延長された世界の中で見るのは少なくとも狂人たちです。彼らの想像力を演技によって事物に混ぜたいのは取分け言葉による芸術家たちですが、彼らは決して騙しません。もしも単に馬の足音を聞いたなら騎士が来るのを期待する様に、誰もが予想するものに関しては決して対象の形がありません。光の戯れによって目に見えない限り、私はその馬が見えません。そして、私がある馬を想像すると言う時でも、せいぜい確固としないで固定出来ない素描を描くだけです。以上は知覚による素朴な観念です。

しかし、この事例そのものについても批判が既に働くことが可能です。もしも視界が霧で妨げられたなら、あるいは夜になったなら、そして馬に少しは似ているが何か下手な素描の様なものが現れたなら、その時は何でもないものでも実際に馬を見たとき々は断言することがないでしょうか。ここでは本物でも偽物でも一つの予測が、対象の外観を良く理解することはあり得ます。しかし、もしも感知したその事物がその時に変えられても変えられなくても、あるいは単に私たちに間違った言葉が投げられても、今は議論しない様にしましょう。というのももっと適確に次の様に簡単に言った方が良いでしょう。事物を知覚することは全てが予測です。

良く検証してみましょう。あの遠い水平線を、私は遠いと思いません。私が遠いと断言するのは、その色彩や、私がそこに見ている幾つもの事物との相対的な大きさや、細部がぼんやりしていることや、水平線の一部を隠している別の様々な対象が干渉していることによるのです。ここで私が断言することを証明するのは、画家たちが遠くの山の知覚を、一枚のキャンバスにそれらの外観を模倣して私に与える術を良く知っていることです。しかし私が見るのは、あそこにある水平線です。私が近くの樹木をあそこにはっきりと見るのと同じです。そうして私はそれらの全ての距離を知覚します。この距離の骨組みが無いとすると、風景とは何であるのか私は何も言えません。多分、それは私の両目にはぼんやりと混乱した一種の光に過ぎないでしょう。この話を続けましょう。私は陰影が非常に微妙な大型メダルのレリーフを見ているのではありません。子供が輪郭と色彩を解釈して事物を見るのを学ぶことは、誰にでも容易に見抜けます。更にもっと明白なことは、あその遠い処では私はこの鐘の音が聞こえませんし、以下同様です。

一般に支持されていることは、私たちに教えるのはそれに触れることです。それは純粹で単純な確認によるものであって、如何なる解釈もありません。しかし、それは何ものでもありません。私が立方体の骰子に触れることはありません。いいえ、違います。私は辺と角と、固くてすべすべした面を次々に触り、全ての外観を唯一の対象に結びつけみて、この対象が立方体であると判断します。あなたは他の事例も当たって下さい。何故なら、この分析は非常に遠くまで及びますし、それらの最初の歩みを良く確保させることが重要であるからです。その上、余りに明白なのは立方体をしていて固いこの骰子は全面が白いのであり、それと同時に幾つもの黒い点が付けられていても、私には意味のある一定の行為として確信することが出来ません。私は骰子の全ての面を同時には見ません。そして目に見える面は同時に決して同じ色をしていませんし、同様に他にも同時に私にはそれらの面が等しく見えません。しかしながら私が見ているのは立方体です。等しい面をしていて、全面が等しく白いです。それなのに私はこの事物を立方体に見ま

すが、その証拠は触れているからです。私が一つの対象に異なる感覚を数々の知覚の結合によって認識することを、プラトンは『テアイテトス』の中で、如何なる感覚によるのかを尋ねていました。

骰子の話に戻りましょう。私は一つの平面に六つの黒い点を認めました。そこには理解力の働きがあるのを認めることは困難を生じないでしょうし、少なくともその感覚が内容を示しています。これらの黒い点をざっと目を通しながら、そして一つ一つの順番と位置を記憶に留めながら、私はついにそれらの点が六であること、つまり二掛ける三が五足す一である観念を些か苦勞して最初に形づくりします。計算する行為と、次から次に手と目で外観から立方体を私に認識させるのを認めるもう一つの働きの間に、類似があることをあなたは気付くでしょうか。そこからは既に知覚が理解力の機能になっていて、私の風景に戻るには、最も理性的な精神が信じられない位に自分自身をそこに身を置いているのは明らかです。何故なら、この水平線の距離にも言葉が無いけれども、骰子と同様に考えられますし結論付けられるからです。そして私たちは既にそこでは、私が話した素朴な観念に対して防御態勢を取っているのです。

もっと近くから見てみましょう。この水平線の距離は数ある事物の中の一つではありません。勿論、事物と私の関係は思考され、推断され、判断を下されたか、あるいは求めている様な関係です。私たちの認識の形式と内容の間で行わなければならないことは、重要な区別を見せることです。風景と全ての対象を支えるこの秩序と関係は、その区別を決定するものであり、そこから現実の堅固で本当の何ものかを生んでいます。これらの秩序と関係は、形あるものであり、思考された機能を明確にするでしょう。そして、狂人とか熱狂者が事物の中での彼ら自身の判断力の誤りを見て、それらを現在の堅固な事物と見做しているとしか見ないのは誰でしょうか。ここで見る事が出来る哲学的認識の手本は、抽象的な言葉によって、より一層高度に定義しています。その様にして最初の歩みが始まるや否や、私たちは如何なる目標へ行くのか大変良く気付きます。そして、どんな問題においてもこの観察は、哲学的探究とその美名を受取りたいと思っているあらゆる無駄な試論を区別するためにも適切なのです。（完）

## 第二章 諸感覚の錯覚について

---

諸感覚の認識は、距離や大きさや対象の形について間違っただけではありません。私たちの判断力は屢々経験に従って明白になりますし、私たちの認識を立て直します。私たちはその時、理解力に良く目覚めます。間違っただけな錯覚は判断力が暗黙の裡に示されているものである程に、それらの事物の外観自体が私たちには変化した様に見えます。例えば、もしも私たちが上手に絵の具を塗った或るパノラマの絵を見たなら、その距離や奥行きは実物のものとして把握していると思います。カンバスは私たちの視線の前では窪みます。従って私たちは感覚に関して何らかの欠陥によって錯覚を何時も説明したがり、目も耳も同様に行います。殆ど全ての認識において認めること、理解力の働き、そして結局は対象の形と私たちが取り違える判断力を別のものの中に見抜くことは、哲学的認識においては偉大な一歩を生みます。考察するのに豊富な材料を発見する人々のためには、ヘルムホルツの「生理学的光学」を参照して、幾らかの単純な事例をここで私は説明します。

確かに私の手の上で重い物体を感じれば、まさにその重さが働いているのであり、私の意見は何も変えない様に見えます。しかし、ここに驚くべき錯覚があります。もしも、あなたが同じ重さの色々な物を誰かの手に持たせてその重さを量らせたなら、鉛の球や木製の立方体や大きな段ボール箱では容量が大変異なっていますので、一番大きな物が常に一番軽く感じます。例えば、ほぼ同じ大きさの青銅の管の様に、もしも性質が同じ物体であるなら、結果は更にもっと微妙に感じるでしょう。もしも、それらの物体を輪や鉤にしてつなぎ留めて歩いても、その錯覚は長く続きます。しかしその場合、もしも目隠しをしていたなら、錯覚は無くなります。そして、私が錯覚であると良く言うのは、それらの想像上の異なった重さは、熱さや冷たさを指に感じるのと同じ位に明瞭になるからです。しかしながら私が連想した状況に従えば、この重さを判断する誤りは理解力に張られた罫から生じているのは明白です。何故なら、一般的に一番大きな物体は一番重いからです。その様にして視覚に従って私たちは実際に一番大きなものが一番重いのを期待します。ところがその印象は、それに優るものは何も与えないので、私たちは最初の判断力に戻ります。そして、私たちは期待した重さよりも軽く感じて判断し、最終的には他のものよりも軽くと感じます。この例で良く分かる様に、ここでもやはり私たちは、関係と比較によって感知しますし、予想が対象の形を理解すると、今度も又間違えるのです。

視覚の一番有名な錯覚も同様に容易く分析されます。私は、遠近法で街灯と人物がまさに同じ大きさに描かれた絵を特に指摘しますが、私たちは最早測るまでもなく、同じ大きさであるとは思えません。ここには対象を大きく見せる判断力が既にあります。しかし、もっと注意深く点検してみましょう。対象はそれ自体の大きさがどんな大きさにもならないのですから、決して変化しません。大きさは常に比較されます。従って二つの対象の大きさや全ての対象の大きさが、部分部分ではなくて全てが分割されずに、実際に形づくっています。数々の大きさが全体で判断されます。そこから分かることは、物質的な事物は外部的部分で常にお互いに分割されたり形づくられたりしているが、これらの事物に関する思考がその中で一つ一つに分割され得ると受け取られないことを混同してはならないことです。仮にも今は、この区別が難解で何時も思考した儘でいなければならないのが困難であっても、途中では我慢して下さい。或る意味では物質的と考え

ると、事物は部分的に分割されますが、一つの部分は他の部分ではありません。しかし、或る意味で思考と考えると、事物への知覚は分割されずに部分ではなくなります。言うまでもありませんが、この単一性が形式になります。私は決して先走って言っているではありません。私たちはこれから直ぐに空間と呼ばれているこの形式を最初の素描として述べなければなりませんし、幾何学者たちが理解力によって沢山の事物を認識しますが、これからお分かりになる様に、感覚で認識しない訳ではないのです。

困難なこの説明をもっと良く準備するために、私は立体鏡を例にして考察する様に読者をご案内します。それは、この器具の理論と操作が読者に再び慣れる様になってから後になるでしょう。今は既に立体鏡のレリーフが目に飛び込んで来る様です。しかしながら一つのレリーフに似たものは何もありません。問題なのは私たち一人ひとりの両目にとって、数々の同一の事物の外観にも相違があると結論付けられることです。レリーフを作る私たちにとってのこれらの距離は、与えられたデータとしての距離と同じでなく、寧ろ思考された距離であり、有名は次のアナクサゴラス(1)の言葉によって、一つ一つの事物をその場所へ投げ返していることは余りに明白です。「全ては統一されていた。しかし、理解力がやって来て全てを整理したのである」。

読者は既にお気づきでしょうが、諸感覚による認識には何らかの科学があります。どんな科学も事物の中で、より正確な知覚に存するともっと後で理解しなければなりません。私たちのどんな努力も今後は諸感覚の中に理解力を発見することであり、それは内容と形式常に識別しながら、しかしそれらが別々にならない様にして、理解力の中にも諸感覚を発見するのは大変な努力が必要になるでしょう。その点について常に些か近い処にある論争話を無視する様にするのも、大変に困難な仕事です。そして余り訓練をして来なかった人々にとっては、全ての喧嘩が危険である様に論争話も危険なのです。(完)

(1) アナクサゴラス(前五〇〇～前四二八)は、古代ギリシアの哲学者で、宇宙万物の種子秩序が理性によって生じると説いた。

事物の運動に関する錯覚は、容易に分析出来ますし、非常に良く知られています。例えば、事物が反対の方向へ走って行く様に見えるためには、観察者が運動すれば十分です。同様に、事物が等しくない運動をすれば、その結果は或る事物が他の事物よりも速く走っている様に見えます。そうして月が昇って来るのを見ても、乗客と同じ感覚になって走っている様に見えるでしょう。同じ種類の効果を生んでいるのですが、もしも乗客が近づいて来る対象に背中に向ければ、背中の地平線が彼の方へ近づいて来る様に感じるでしょう。その点については観察してから説明して下さい。あなたには大して難しいことはないでしょう。それに反して、これらの事例を解釈すること、良く知っていることを一度でも解釈することは大変に困難であり、それは哲学者に必要な精神の果敢な力にとっての試練に役立てることが出来ます。如何なる方向から哲学の初心者が熟考を導くことが出来るのかは、次のとおりです。彼が先ず考察するのは、現実のものになっている運動と、樹木とか月に付与される想像上の運動には如何なる相違も無いことです。如何なる相違も、人々が持っている知覚で理解して下さい。次に注意することは、それらの想像上の運動が少なくとも関係によって知覚されることです。それは作品への理解力をここで更に見せてくれています。そして外観を説明するために一つの運動を思考しながら、それは言葉になっていないけれども、既に厳密に話をするための科学の方法になります。そして、比較される点、次から次に動く位置、一定しない距離のもの全てが現れて、恐らく運動になっているもの全てに固定されて集められていることが取分け理解されることでしょう。従って動くものそれ自体を生む様に何時も場所を変えながら、単にその次に来るものに私たちの運動の感覚が存することは、それどころではありません。緻密なゼノンは良く言いましたが、動くものは絶えず何処にいるのかに正確であるので、決して運動の中には無いのです。それと同じ他の困難は全く分割出来ないものであり、私にはそれを感知したりその全体を思考したりする運動は連続的なものでしかありませんけれども、全ての運動の位置は同時に把握されるものです。従って私たちが知覚として把握するのは、決して運動の出来事ではなくて、実際には動きの無いその観念であり、その観念による運動なのです。認識全体の領域で余りに早く脱線してもお許し頂けるでしょう。これらの分析は決して分割されるものではありません。同様に、私たちがそれらの単一性に目を通して行かせながらも、やはり全てを考慮に入れていることにもう一度注意して下さい。その様にして私たちは行かせる儘にしながらも、その運動を知覚するのです。そうなのです。しかし、前もって用意されて良く保存された道は、数々の定められた地点に引かれた線に沿っていて、一言で言えば不動なのです。その点を少しでも前に考えたなら、運動に関する形式をどんなものでも考えながら好きなだけ与えられる錯覚以上に、検討するのに有益なものは最早何もありません。従ってコルクの栓抜きを回転させただけで、軸に従って移動して行く様に見えます。こう言っても良いのですが、回転していない様です。あるいは又、風車や風速計の軸を別の方向へ向けたいと決めたなら、それらが回転している感覚を外観の中でも変えることが出来ます。その様に定まった点を選択すると、別の運動を生みます。相対的な運動の概念は従って言葉が無くても認識となって現れます。

運動の知覚としてここで言われたことは全てが触覚にも適用されますし、取分け視覚の手助け

があるにしろ無いにしろ、接触とか緊張によって私たちが自らの運動を持っているとの認識に適用されます。感覚の観念の始めが、色や音が外から与えられる様に、運動にも与えられているというのは内容の無い観念であると容易に考えられます。私が感じた運動に行き着くのは何時も思考された運動によります。そして、運動の一部分も運動から出たものであり、運動全体の中にあります。筋肉の感覚について良く知られている議論は、哲学的な認識とは無縁であることが多分あなたは直ぐに判断を下す様になるでしょう。それは実際に望んだ様に殆ど行うことが出来る言語が、奇妙な対象として叙述されて点検された後で、空虚な弁証法的な理論はもっと遅く理解されるしかありません。（完）

生まれつきの白内障から全治した盲人たちの〈観察〉は、最も偉大な哲学者たちが何時も見抜いて知っていても、それと同時に哲学者たちの注意を引き起こしていました。それは見ることを学ぶことです。つまり光と影と色彩によって与えられる外観を解釈することにあります。いずれにせよ、確かにこの種の医学上の観察も知るのは良いことです。しかし、私たちの視覚そのものを分析することや、そこで見破ったものを提示されるのを考察することは、もっと哲学的方法に適しています。森の地平線は、視線にとっては遠いものに見せないが、青味がかっているのは空気の層が干渉しているのは大変に明白です。少なくとも私たちは、それが意味しているものを全て知っています。同様に、遠近法を解釈することも知っています。それは柱や窓や並木通りの木々の様に、同じ大きさの対象物が私たちから別々に距離の位置の処にある時、遠くにあればある程小さく見える知識を特に与えてくれます。そちらの方へ注意を向ければ、そのことに気付くのは大変に容易です。しかし、時々は無邪気な理解力が真実を知っているとばかりに、描写したいと思う外観に反対します。例えば余り観察しなかった人が、向こう側の木々の緑は少なくともこちら側の木々よりも遠くにあるのに、同じ緑色をしていると大変良く主張します。もう一人の人は、絵を描こうとしている時に、雨傘の方が大きいのに、何よりも人物の外観を小さく描きたくないのです。私たちの両目は一つ一つの事物を二つのイメージ（像）で示しているのを、認めたがらない人を私は知っています。しかしながら遠い対象のイメージが直ぐにでも二つになるためには、一本の鉛筆の様に非常に接近した一つの対象を両目で見詰めれば十分です。しかし無邪気な理解力は、大変に強い理屈を次の様に言って、これらの外観を否定します。「そんなものはないのだから、私は見る事が出来ないのだ」。画家たちは反対に、自分たちの仕事によって事物の真偽に最早注意しませんし、少なくともその様なものとして外観を再現しようと努力することに導かれて行きます。

運動している事物は哲学者にもっと良いことを教えてくれます。ここでは外観がより一層強くなり、事物の真実は一見するまでもなく肯定されます。例えば、速く走る乗物に乗って地平線の方へ伸びる一本の道を軸にした車輪の様に、木々や柱が走って全ての風景が回転して行く様に、それでも存在しなくなるのが分かるのを見る妨げになり得る最大限の速さに、逆上する旅行者はおりません。最も偉大な天文学者も、地球が南北を軸にして実際に動いているのを良く知っていますけれども、大空の中を星々が移動して行く様に見ています。それ故にこれらのことを思考するや否や、観察と理性の働きによって外観に倣って事物の真実を構成し直すことを学ばなければなりません。そうしてここでは、目の先生になるのは手であるのは大変に明白です。耳も又教えなければなりませんし、私たちは音に倣って、音を出す対象のものの方向と距離を測ることを少しずつ学びました。つまりそれは、私たちが見て触るために行わなければならなかった動きであり、更にもっと明白なことです。獵師や砲兵は分類化された観察と、体系化された経験でこの教えを続けて行きます。このことに倣って些か勘違いもありますが、子供は見るものを掴み、聞くものを見詰める訓練をする勉強から判断することが出来る様になります。

最も難しいのは恐らく触れる感覚が、それも教育の一環ですが、それだけで学ばなければならなかったことに気付くことです。盲目になった人が、それ以前には気付きもしなかった触覚の多

くの印象を意味づけるために学んでいることは周知のことです。例えば彼が友人の手を握れば、私たちが普通に顔色を読むことよりも、沢山の事を見抜いているでしょう。そこから出発して遡ってみると、柔らかいものや固いもの、つるつるしたものやざらざらしたものについての子供の経験に一つの観念を生むことが出来ますし、数々の事物の味や匂いや色に関しても全てに結論を下すことが出来ます。これらの認識には、私たち自身の肉体の認識に注意して考えなければならぬのも明白です。それは直接的なものになり得ないとしても、色々な関係を含んでいる場所とか距離という概念そのものから生じるものです。それ故に、どんな直接的な印象の中に与えられることは出来ません。従って私たちに全て与えられている様に見える肉体の認識と事物の認識においても、実際には全てが学ばれているのです。詳細なことや秩序に関しては、それらを見抜くために有効に訓練することが出来ますが、本当らしいこと以外を望むことに意地を張らないことです。さもなければ緻密で際限の無い議論に陥ることでしょうし、それは真の哲学にとっては無縁のものなのです。（完）

或る距離があったり、それらの距離を想定する場所の全ての関係から形と大きさが知覚されるものは、レリーフの様に、何時も単に可能な運動による効果があります。その点について長く考えることは重要です。何故なら全ての事物の形式である幾何学の空間があって、しかも事物に似ていない奇妙な性質が生じているのはそこであるからです。例えば、私がレリーフとして知覚するものは現実の凸凹ではなく、その瞬間そのものに触れて知るのであると言いたいのです。私が認識しているのはしるしです。もしも、それらのしるしを事前に持っていたなら、両手で知覚するものを予測させてくれます。このことは距離がどんなものでも真実ですし、予測に過ぎません。その点に戻ります。私は恐らく熟考そのものからあなたの精神に現れる、思索に今は従いたいと思いますが、全てが予測ではないということです。その様なものとしてこれらのしるしは、現在も十分に与えられています。正確に言えば、それは出来事です。そして、もしも私がそれを近くから見詰めたなら、それらは私の両目と両耳と両手の出来事になります。私は耳でぶんぶんいう耳鳴りを誤って解釈するかも知れませんが、兎に角、私が知覚しているのは事実です。それが血管の中を循環する血液のせいではないとしても、兎に角、私が知覚しているのは事実です。私は凸凹を誤って見ますが、その光と影を良く知覚しています。そして、その影が私の目の疲労によって起こるものでしかないとしても、もしも私が余りに長く本を読んでいたとしても、激しい光とか暗い夜に変化したりぼんやりしたりする形の儘誤った色を感知するのが本当の様に、その影を感知するのも同様に本当です。偏見から私が指先の重さを間違って解釈することはあり得ますが、それらを感知していることも又あり得ます。更に、もしも私に熱があるために葡萄酒が苦いと思っても、いずれにしても私がこの苦さを感知しているのは本当です。現在は私が推理するものについての何らかのデータが常になければなりませんし、そのものに倣って私は見抜きますし、先に始めます。そうして目に見える現実の運動は、色や光に何らかの変化がなければ、決して感知されないでしょう。私は、身体についての物理的行動によって感じるものに倣って事物を感知します。そして、この最初のデータが無ければ、何も感知しませんし、それが刺激と呼ばれているものです。しかし、それを仮定して、まだこれから重要な二つの点に注意しなければなりません。先ず第一点は、ここで生理学者たちの道を踏み外してはならないことであり、感覚器官又は脳の中で、事物によって生じた肉体的運動を、刺激によって理解したいと思っはならないことです。その様に話すのも、それは合成された知覚で、大部分が想像力である知覚を述べることであるからです。その知覚によって生理学者は人間の肉体の構造や外部の行動への反撃を想像します。余りに大雑把ですが、大変に一般的なこの誤解を良く考えて下さい。私は所有している知覚を考察しなければなりません。そして、教えられたり推断させられたりしたものを排除して、単に示されていることを決定するために探究しなければなりません。そこから私が二番目に注意しなければならない点に達します。それは如何なる予測も無く、刺激が何であるのかを知ることは、そんなにも容易ではないのです。何故なら、私が良く考えることは、視覚にとってのその情報は並置された色彩の数々の斑点に存在することであるからです。しかし、そこでは既に単純化された知覚の中で私が、凸凹が無くても私の両目には距離感があって一枚の絵に、全ての色彩を齎していることしか見ないのは誰でしょうか。色彩の単純な刺激は確かにもっと単純な何

ものかであり、私の肉体のどんな部分でも感受されることはないに違いありません。というのも、その様に感受することとは、既に知覚することであるからです。私は形と大きさと位置を認識するのを欲するからです。従って、純粋な刺激を把握するには、いわば思考すること無く考えなければなりません。夢想とか、半睡とか、最初の目覚めとかの、或る種の名状し難い何らかの状態からは、盲人に視覚が示された時の最初の印象同様に、私たちにも十分に近いものになることが出来ます。しかし、彼はまさしく何を言って良いか分かりません。そして私たちが子供の時の最初の印象を保って置かない以上に、思い出を保って置けません。これらの指摘は、あらゆるものの中で最も明瞭な出来事や、最も良く限定されたものの様に、粗雑な思考体系を排除するためのものです。この体系に倣って私たちの刺激は続いていて、見分けられ、繋がっていて、呼び起こされます。一つの出来事とは、その最初の衝撃や、対象と人間との最初の出会いとは別のものであると私たちは言わねばなりません。内容と形式を区別しなければならないでしょうし、その様にして最も単純な知覚も既にそれを教えてくれているのです。

知覚と刺激を識別するためにはもっと一層困難で、殆ど探究していない道がもう一本あります。それ故に質と量を考察しなければなりませんし、それらの性格によって明らかにしなければなりません。それは最も困難な思索の中へ直ちに身を投じることであり、読者に最も苦しいものを与える『純粋理性批判』の中の一つの部分です。ここでもう一度大きさと何か、質とは何かを正確に述べてみましょう。例えば私が線を引いたり、数を数えたりする時の様に大きさが増大する時、質の部分は別のものの儘付け加わっています。例えば光がだんだんと強くなる時の様に、質が増大する時、明るさに付け加わるものは如何なる区別も無く、それに合体します。その光は変えられて、私がおっと強いと呼ぶ光は実際には別の光です。もっと濃い青は実際には別の青であり、もっと強い圧力は別の圧力です、等々と良く言えるでしょう。しかしながら私に増大する光が抗い難く齎されるのは、最も弱い印象から目が眩む閃光までの単なる光の強さです。この大きさは従って単に昔から増大したり徐々に減少したりすることが出来ますし、それを強さと言えははっきりしています。しかし、これは純粋な質ではない様に思えます。私たちはここで並置されたこれらの強さを私たちの視線で整理するために、はっきり言うのにその大きさを利用して思えます。純粋な刺激には決して増大も減少も無く、正確に言えば大きさはありません。しかしながら、少なくとも変化や新しさはあります。説明出来ない不可解なものです。しかし結局のところ多くの人々が試みた様に、生来の直接与えられた印象を描写し様と努める表現に凝りながら、それに近づくことが許されます。以上のことは全てが幾何学以前のものです。しかし、これらの微妙な探究をここでは明らかにして、言語は不完全にしかそれらを表現しないと予測するだけで十分です。記憶に関する特別な研究は、最初の経験とか最初の印象を研究しても無駄であることを、恐らくもっと正確に説明するでしょう。これらの企てには、まさに最も多く解釈している最も大胆な知覚が含まれている様に見えます。(完)

恐らく読者は、善良な哲学者たちによって大変幸せに使用されている、表象というこの美しい言葉を完全な意味で把握し始めています。事物は私たちに決して述べませんが、私たちは事物を述べます。又は、もっと正確に言うと、事物を表します。私たちの知覚においては、知覚を理解したいと思うのは極めて簡単です。何時も、思い出、復元、経験を要約します。語られた判断力のもので既に科学のものと、直観のものとを区別することは少なくとも有益です。直観力のある人は、少なくとも外観としての直接的な認識の様に論証的なものに反対しますし、研究や反復や理性の働きによって形づくられる認識に反対します。ところが知覚は、何時も言葉と接近と推測によって完全になりますし、注釈をを付けられます。例えば、木々が並んだ一本の線は道を示していると私は思いますし、あるいは三角形の影は鐘楼の尖端を示していると思います。更に又、唸る様な音は自動車の音に違いないと思います。これらの認識は、ありふれた言葉の意味から言うと、直感的なものであると思えるかも知れません。しかし、この章においては最も厳格な意味で、まさしく直感的認識と思われるものを問題にしています。つまり、それらの認識を解釈することであり、事物の様に触れる表象の何らかの性格からも極めて鮮明なものでもあります。

私は極めて遠い水平線を見ています。私の両目が教えてくれるものに倣って厳格に言えば、他のものと同様にその色彩を良く表していますし、こう言って良ければ距離はありません。しかし、それでも距離があるのなら、事物として私に触れます。それは事物の真実そのものです。私が青味がかったこの色彩から引き出すことが出来るものです。この距離が大変良く私に見えて来て、残りのものも全て見せてくれます。それは一つの事物ではないのですけれども、大きさや形や色彩に一つの意味を与えています。しかし十分に注意して下さい。この距離は少しも水平線に所有されていたものではありません。そうです、事物から他のものへの関係であり、事物から私への関係です。もしも私がその所有されたものを知りたいなら、その距離に目を通しながら取り除きます。或る意味で私は常に表象によっていますけれども、その時は経験を十分に積むことになるでしょう。勿論、その様にして私は今距離を見ていますし、その様にして今感じていますし、その様にして今思考しています。私は距離を知り、可能なあらゆる経験を積みます。距離とは私のものであり、事物のものではありません。私は距離を設けて、線を引き、決定します。本物であろうと偽物であろうと、距離は常に距離であり、分割出来ない関係にあって、実際に歩き回ったものではありません。それらの部分はお互いにつけ加えられます。しかし全てが設けられているので、次々に分割されたり歩き回ったりしますし、或る意味で前もって分割することも歩き回ることと与えています。

方向も又、同じ性格をもっと明らかにしています。何故なら、方向は私の肉体の回転に関係して事物を整理するからです。しかし、それでも事物ではありません。方向が決定されます。それは形式であって、受け取られたものではありません。空間についての全ての逆説がここに集められます。そして全ての困難が屢々余りに早く通過しますが、まるで作者が捏造したかの如くです。距離と方向は幾何学にとっての二つの武器です。さらに如何なる事物の助けも借りず、黒に対する白、点、線、角という恣意的に考えられた事物について大変に良く知っていても驚くことはないでしょう。でも、余り先走りしない様にしましょう。

幾つもの距離から私は、深さと呼ばれている距離を選択しました。何故なら、その空間には性格が無くて、設けられているものであるからです。それは経験を決定しますし、より一層容易にそこに現れるからです。今は、あなたの目の前に広がっているか、目に見えない盲目の距離ですが、やるべき努力を決定する様な他の色々な距離を考えて下さい。これらの距離にも又距離があること、つまり分割出来ない関係があって、深さと同種のものであるとあなたは認めるでしょう。そして、きらきら輝く色彩も又表面の色彩として理解しない様にして下さい。あなたが一つの平面上に広げたいと思っている景色は景色自身で平面に描き、豊かであるとか貧しい色彩によって私は見えて面白いものや悲しいものを理解しているとあなたは信じるでしょうか。この幻想からあなたを逸らせるには、この平面からあなたを離す深さによってしか意味を持たないことを、私は単にあなたに気付いて貰うだけです。そして、斜めに見える数々の表面に関しては、池の表面や山の斜面の曲線の様に、あなたは思考の中で立て直します。その様にして各々の事物の一つの意味と平面を与えますし、厳密な形式の中で外観を理解する時には更により一層明白になります。容量に関して常に見抜かれて、設けられて、思考されています。というのも分割されたり、他の表面から、そしてその背後にある他の容量から発見されたり見抜かれたりすることがなければ、決してそこに這入って来ないからです。

恐らく、あなたに最善を教える立方体の骰子にここで戻りましょう。立方体がどういうものであるのか、定義上は同じ辺、同じ角、同じ面であることを誰もが知ることが出来ます。しかし、誰もその様な立方体を見ていません。誰もその様なものに触っていません。立方体の骰子の形をありありと思い描くには、一つ一つの経験では見たり触ったりさせてくれないこの形を、経験の中で維持して肯定することなのです。もっと正確に言うと、既に科学が明らかにしている他からの位置と方向と距離によって、それらの全ての外観と知覚とそれに付随した影までを説明することなのです。ところで、この立方体の様々な外観を描いてみて下さい。そして、あなたが同一の形を認める時には感嘆して下さい。もっと良いことをして下さい。鉄のカーテンレールで作られている様に、全ての辺が目に見える様に立方体を描いて下さい。それから或る時は一方の側面と上方から見て、又或る時は他方の側面と下方から見たとして、二つの面に基づいて立方体を考える訓練をして下さい。形も方向も命令される様に理解する外観をあなたは見るでしょう。その外観は多分、真実の道の中で常に考察への道を教えるものであり、適切な哲学上の経験はそれ以上ありません。要約して言うなら、私たちは空間の中で事物を知覚しますが、諸方向という対象は空間によってしか命じられたり、区分されたり、知覚されたりしないのですけれども、その空間は諸方向の一つの対象ではないと言えるでしょう。空間は連続していると言えるでしょう。つまり分割出来ないものです。空間は大きさや形の父ですけれども、空間そのものには大きさも形もありませんし、結局のところ小石の様に存在するものは何も無いと言えるでしょう。そこから次の様に、空間は有限か無限かという問題が生じて来ますが、如何なる意味も無いのは明らかでしょう。しかし、その点に関しては一度ならず戻って来ることになるでしょう。その困難な課程において、あなたの力を調べてみて下さい。あなたは哲学するとはどんなことであるのかを、今では少しは知っているのです。もしもこの種の探究が喜びを与えないとするなら、神々が現れる前兆の様なものです。本書を読むこともありません。（完）

しかしながら少しは先に始めなければなりません。余りに容易に非常に広まったこれらの知覚の探究は、本当の困難に直ぐに赴かなければ遊びでしかありません。それなのに私はそこに固執したいのです。カントが『批判』の中で空間を、理解力の構築としてではなく、感覚の一つの形式として考えたがっていることは誰もが知っています。私は、先立って行う分析によって、科学の諸関係を言葉の本来の意味の代わりにするために、この透明な感覚を備えた一つの空間の枠に入れたイマージュを全て排除する様に導かせるのは寧ろ明白です。カントが申し分なく空間を処理する時には、空間が一つの形式でしかないことを決して忘れません。でも、それは初心者にとって大切なことです。ところで、空間は感受性の一つの形式であるとカントがつけ加えて言う時、次のことを強調しているのです。空間を所有することは、科学が組み立てる理解可能な諸関係にすっかり立ち戻らせることは出来ませんが、それらは明白な認識の形式であるということです。その点については、事物に関して合理的に扱っているアムラン(1)を読んで下さい。

問題が曖昧になって来るのは、三つの座標が常に一点に固定されている三次元の空間が私たちの経験としての出来事になる、と数学者たちが言って気に入っているからです。しかし必然性の真実にとっては奇妙なことです。この問題は保留にさせて置きます。私が今まで述べて来た空間は、まさしく精神の活動における形式と呼ぶものと異なっていると決して理解しません。数学者たちが代数に騙されるとか、三次元が距離や方向の観念そのものよりも経験上のデータとのあらゆる混合によって純粋でなくなることもあり得ます。しかし、詳細なことに今は這入らないでいましょう。読者を目覚めさせることが重要です。悩ませることではなく、弱さよりも寧ろ隠れている強さを表すことが重要です。

私は、あるが儘の人間の認識を書き出すことに取分け集中しながら、私たちに遠近の事物を見させてくれる幾何学的形式の予測と、所謂科学の諸形式との間に既に現れている大変顕著な類似を強調します。これらは注意に過ぎません。私は目的を忘れません。そして、体系の中で完成する学説には達しない様にします。議論が人々の間で終わりになる前に、世論や品行の治安は有効に行使することが出来ます。

刺激に関する学問というものが決して無いことは、重要なあらゆる哲学者たちが、取分けプラトンやデカルトが強く示していました。刺激というこの良く知られている用語の意味を正確に理解するための準備が、私たちには成されている様に見えます。その強さを測るには、長さにはしか関係していないのは明白です。例えば、同じ強さの二つの音は、同じ距離の処にある膜に同じ振動を生じる二つの音です。二つの温度は、きちんと同じ量で用意された水銀の膨張で比較されます。カロリーは、氷が水に溶けて変化した重さによって測定されますし、重さそのものは天秤棒が均衡して変化しなくなることで量られます。その様にして科学は、今まで述べて来た幾何学的要素も、感知し得るデータに代えて理解されます。そして、強さを知ることが出来るものはどんなものでも、要するに長さを測ることになります。しかし、そこには科学的な事実しかありませんし、直接的に分析して明らかにしなければなりません。

知覚とは、厳密に言うとなら私たちの運動とそれらの結果の予測です。そうして恐らくその目的は、常に何らかの刺激を受け入れたり排除したりすることにあります。まるで私が果実を摘みたい

とか、小石がぶつからない様に避けたいと思うが如くです。良く知覚することとは、私がこれらの目的に達するために行わなければならない運動はどの様なものを、前もって認識することです。良く知覚する者は、行うべきことを前もって知っています。猟師は、鳴き声を聞いて犬たちと再会する術を知っていれば良く知覚しますし、飛び立つヨーロッパ山うずらを発砲する術を知っていれば良く知覚します。子供が両手で月を掴みたい時には誤って知覚していますし、以下同様です。それ故に知覚には真実とか、疑惑とか、誤りがあるのかがその評価になります。遠近法やレリーフにおいては、特に視覚に大変敏感です。ところが聴覚や嗅覚にも敏感で、恐らく盲人が両手で触れる時には訓練された触覚も同じく敏感です。刺激そのものに関しては、疑惑も無く、誤りもありませんが、首尾一貫した真実によることもありません。刺激はそれを人が感じると、何時も現実のものになります。従って幽霊の知覚は間違いです。それは私たちの両目が感受しているものではなくて、消えやすい光とか着色された染みであり、幽霊と思うのはまさに予測なのです。幽霊を見ることは視覚の印象によって推測することであり、手を伸ばすと何かの生き物に触れるだろうと思うからです。あるいはもっと適切に言うと、それは私が窓の前で今見ているものを推測することであり、もしも私が或る動きをすれば、戸棚の前でも又それを見るでしょう。しかし私が現実を感じているものに対しては何の疑いも無く、私はそれを感じています。そのことに関しては決して間違いは無いので、そのことに関しての学問も決してありません。私が感じ取ることに関しての研究は、どんなものでも常にそのことが意味するものや、如何に私の動きと共に変化するのかを知ることにあります。そこからお分かりの様に、対象のものとは本質的に位置と形を持っている何らかの事物です。あるいはもっと正確に言うと、対象のものの中にある真実とは、その形と位置と所有するもの全てを決定している空間上の諸関係全体です。今は次のことを熟考して下さい。天文学者は、その様な諸関係によって十分に計測された知覚の後で、地球が太陽の周りを回っていることやその外の類似のことを言い、そしてこれらの運動によって起こること、例えば日食やそれが見える場所を预言するまでの、その様な諸関係を決定すること以外に他のことは行わないことです。今はこれらのことを指摘するだけで十分です。(完)

(1) アムラン(一八五六～一九〇七)は、哲学者でヘーゲル哲学をフランスに導入した。

デモクリトス(1)が、太陽と月は本当に私たちが見ている様であって、あるが儘に見える大きさと、私たちがそれらを見て信じている距離を主張したがっていた時、彼は自分の学説が無理矢理強制するものが何であるのかを良く知っていました。彼が船に乗って旅立つや否や、冒険から逃れることは誰にも確信することが出来ませんでした。太陽が私たちから非常に遠くにあることは、月よりも遠くにある証拠を良く知らない人々にとっても今日では一般に認められています。それ故に太陽と月の大きさが、食の時に見られる様に、殆ど同じ大きさに見えますけれども、太陽が月よりも非常に大きいことも一般に認められています。従って見ただけでは太陽と呼ぶ対象が真の太陽で、眩い球形のものであるとは主張出来ません。同様に真の太陽は、うっかり見詰めると目が痛くなるとも言われます。従って誰も見ることも想像することも出来ないこの真の太陽を如何にして定めることが出来るのか、探究しなければなりません。同様に、私は立方体を知っていますが、立方体もその儘見ることが出来ません。私は立方体のしるしを見ます。真の太陽のしるしを見るのも同じです。真の太陽のしるしのうちで、その大きさ、見かけの運動と本当の運動、一本の棒が回る影も、黒くした眼鏡を通して見た天体の円盤に劣らず重要です。それで真の太陽も他のものによるのと同様に、これらのしるしの一つによって良く決定されますし、時々はより一層良く決定されます。ここでお分かりの様に、一つの対象は他の数々の対象との関係、実際は他の全ての対象との関係によって決定されます。単独と考えられた対象は決して真実ではありません。あるいは換言すると、決して対象ではありません。それは対象が不可分の諸関係の体系に存在するのであり、あるいは更に対象は思考されたもので感知されたものではないと言えます。もしもあなたが、最も単純なものの中にある立方体の例について再び考えるならば、デモクリトスが拒絶しようとして虚しく試みていた逆説を良く理解するでしょう。

正直に言って、世界は見るが如く書かれなければなりません。だが、簡単ではありません。何故なら、感じるが儘に見ないからです。そして同様に、見るが如くに世界が存在していないことを誰もが良く知っているからです。人物を一周して場所を変えてみて下さい。この人物のイメージは何時もぼんやりとくすんでいるでしょうが、地面ははっきりとしていて、より一層明るい色をしているでしょう。しかし、彼はそれとは別のものであり、それらのしるしや別のもものしるしで決定するのが重要であることをあなたは良く知っています。そして、判断されるのは触覚であると言いたい人々は何も手に入れません。それというのも、この人は私の手の印象であるとは言わないでしょうし、次々に別の印象のものでもないからです。反対に彼が私の手による簡単な動きでは、そんなにも変わらないことを私たちは知っています。要するに私たちは、これらの沢山の姿から同一の人であると分かる処まで体系的に外観を十分に集めなければなりません。私が月明かりの時に踊る時、踊るのは月ではないと判断するのも方法は全く同じです。子供の羊飼もこのことを知っていますし、既に科学によって知っています。

古代の天文学者たちは、明けの明星と宵の明星は二つの異なる天体と考えていました。私たちの地球よりも太陽に近い天体である金星は、他の天体の様に大空を一周しないものになっているのです。従って諸関係を誤って程々に認識している彼らは、今日の私たちが行っている様に、二つの体系の外観を一緒に結びつけるまでに至っていませんでした。天文学上の様々な体系を比べ

ることは有益です。何らかの方法によって、色々な幾つもの外観に基づいた唯一の対象が見出されるのは、同一の対象として相応しい一つの運動とその観察者の発見であることはそこで理解されます。しかし、動き出すのが私の列車か相手の列車かを知るに至るのは、他の色々な方法によるものではありません。そうして私は思考することになります。燕が毎年巣を作るのを知っている地下の納屋近くの窓に、一羽の影を見ただけで、私は「ほら、燕が帰って来た」と言います。その燕が前年の燕と同じでないかも知れませんが、その推測は非常に拡大されていますし、部分的には多分間違っています。しかしながら、そこで精一杯理解されるのは、理解力がその体系を構築して真の対象を如何に限定するかです。

従って二つ目で、何故一つの対象しか見ないのかを尋ねることは、余りに些細なことを尋ねるものです。二つの手では何故一つの立方体しか触れないのか、何故見て、聞いて、嗅いで、味わう対象にも触れると人は言うのか、その理由も尋ねなくてはなりません。何故なら、外観だけに止まっていたなら、それと同じだけの大変に異なったものになるからです。これらの注意によって思考するという奇妙な力が、少しずつ自ら明確にしている様に見えます。それは大部分の人々が他人たちとか自分自身に起因する多くの出来事を、少なくとも話の中で認めたいと思っているものです。既に人が気付いていることは、誰もが最初は独りであると思い、狂人も生涯を過ごす外観に倣って共通した一つの世界を精神が思考していることです。（完）

（1）デモクリトス（前四六〇から前三七〇）は、古代ギリシアの哲学者で原子は絶えず運動し、空虚の場所が前提とされ、それは全ての感覚で捉えられるとした。プラトンは彼の哲学に激しく反対した。

間違った知覚として想像力を定義すると、恐らく最も重要なことについて強調されます。というのも想像力は内面の遊戯であり、想像力そのものを伴った思考のものであり、自由な機能で現実の対象が無いものと見做したいと思われているからです。その様にして想像力から、私たちの身体の状態と運動までの関係を知るための最も大切なものを見落としているに違いありません。私たちが明瞭なデータによって多くのことを見抜くための危険を冒す時、想像するための力は先ず知覚の中で考察されなければなりません。そして、知覚はその時に、私たちの全ての経験との関係及び絶えず全ての予測を吟味することが想像力と違っているのは大変に明白です。しかし、どんなに厳密な知覚でも、想像力が常に循環しています。想像力は絶えず現れては消えて行きますが、それは素早い点検、観察による些細な変化によるものであり、結局のところは堅実な判断力によるものです。悪魔も祓うこの堅実な判断力の価値は、取分け情熱の働きの中に現れます。例えば、恐怖が私たちの隙を窺っている夜の時です。いや寧ろ、白昼においても神々は木から木へ走り回っています。そのことは十分に理解されます。私たちは、真の知覚がひらひら飛び交う誤りに対する継続した戦いであると判断したり、非常に弱い標識についても大変に機敏です。お分かりの様に、私たちの夢想はその源泉をそんなにも遠くへ探しに行く必要はありません。

しかし、私たちの感覚器官がそのものによって独創の方法を提供することも屢々起こります。それらの器官を通して良く理解しましょう。私たちの身体は、外部の原因によって沢山の方法で絶えず変えられます。しかし私たちの器官の状態と生命そのものの運動が弱い印象を与えていても、その外のものの静かさの中では大変に強い印象を与えていることには良く気付かなければなりません。かくして、熱のある血液は耳の中でぶんぶん鳴っていますし、口は苦く感じて、震えとちくちくする感じは肌を走ります。私たちが短い瞬間に、諸対象を想像するためには最早その様なことがあってはなりません。でも、それは文字通りに、夢を見ると言っていることなのです。結局のところ屢々私たちは運動によってイメージを探します。あるいは寧ろ、工夫して作ります。もしも身振りとか、もっと正確には鉛筆が両目で追って形を描くだけでしかないならば、あるいは更に両目の活発な動きが実際の知覚を曇らせたり神々を走り回らせたりするだけでないならば、ここでの視覚は消す役割を演じるだけです。聴覚は言葉によって、もっと良く直接的に変えられます。言葉は、例え小さな声で話しても、私たちが知覚する実際の対象です。取分け、触覚が意味しているものは触覚そのものに、私たちの運動の一つ一つによる印象を手に入れます。私は自分を鎖で繋ぐことも、喉を絞めることも、自分自身を叩くことも出来ます。そして、これらの強烈な印象は恐らく狂人たちの精神錯乱の証しでも何でもありません。ここで見るのは、想像力から情熱への結び付きです。逃げる人は全ての事物を誤って見ますし、彼の背後を過ぎ行くものももっと誤って予感し、無秩序な行動によって心臓や肺の活動は倍加し、走ることでそれらの反響を呼び覚まします。不規則な運動はどんなものでも知覚された世界を乱します。従って、私たちは痙攣的な運動に身を委ねるや否や、悪魔や誤りの証しの発明者と同じ様に、絶えずこの世の保守主義者であり建築家です。その上、世界は大変に豊かで、常に私たちの錯乱した対象の何らかの影を提供します。そして、想像力によるどんな仕事においても、何時も外部世界、身体の状態、運動という三種類の原因があります。しかしながら、三種類の想像力を区別

するのは悪いことではありません。第一には、規則的想像力があり、それは大胆すぎる事が無ければ間違えませんし、何時も一つの方法に従っていて、経験に制御されます。その様なものには足跡や僅かな埃についての警官の考えがあります。猟師が自分の犬を殺す様な間違いがあります。第二には、事物から目を逸らしたり両目を閉じたりして、生命の運動やそこから齎される弱い印象に特に注意深くなるもので、幻想と呼べるかも知れません。その幻想は判で押した様に事物には決して混ざり合いません。目覚めはそれ故に突然に起こりますし、しかも安全です。その代わりに第一の規則的想像力においての目覚めは刻一刻と起こります。最後の第三には、情熱的想像力があり、取分け痙攣的な運動や怒号によって定義されるものです。

規則的想像力にも存在しますが、別の意味では三種類の性質を持っているのは、もっと後で述べることになる詩的想像力です。少なくともここでは詩人が如何にして靈感を探すのかを考えて下さい。或る時は事物を知覚しながらであっても、幾何学ではありません。或る時は半睡状態であり、又或る時は身振りを盛んにしたりわめいたりします。建築や絵画の様なものも身体の中に、主題そのもののどんな材料も受け取ります。勿論、芸術は情熱と取分け儀式にも依存しています。従って、そのことに関して今は詳しく述べる時ではありません。（完）

## 第十章 異なった感覚による想像力について

---

想像することとは、或る対象を何時も思考することです。そして、あらゆる感覚に基づいて可能な働きを再び現すことです。視覚でしかない様な想像力は最早、想像力の全てではありません。それは位置も形も無い色彩があるだけの印象です。それらの印象を人間の身体現象にするのを目指すにつれて、次第に想像力から癒えて行きます。或る場所で幽霊を見ることが無ければ、何で幽霊を想像するのか、又何でどんな動きによって幽霊に触れるのかを思い描くのでしょうか。その点について十分に熟考したことも無い昔の哲学者たちは、単に視覚上の想像力とか、他には単に触覚上の想像力を述べるだけです。この種の人々は、そこに対応するのみで、十分に深く研究することはありませんでした。どんな視覚上のイメージも、常に凸凹と距離を含んでいますので、筋肉に関する或る解釈そのものを、そのことによって含んでいるのを認めるのは簡単ではありません。従って曖昧であったり、余りに自惚れた解答を予測しなければなりません。要するにイメージというものは決して無く、想像上の対象でしかないのです。この事例は、考察がここではそれらの探究を先導し、常に明らかにしなければならないことを良く示しています。

保留がなされると、私たちは各感覚によって如何に想像するのか検討することが許されます。味覚や嗅覚にとっては、実際の対象が肉体の反応を生まないで、取分け吐き気の動きの様な無意識なものである想像力の理由を提供することが少しも無いとすると、恐らく言うべきことは少しもありません。同様に、他の色々な感覚による想像力も屢々、味や匂いを決定します。その上、味が美味しい料理を見た目でも、予想によって不味く見えることもあり得ることは誰でも知っています。病気でより一層洗練されたり、あるいは研ぎ澄まされたりした感受性が、一般に大変微かな匂いや味に敏感になることも時々起こります。その様にして想像力も真実になりますが、私たちが知らない間になります。その上、いわば真実でない想像力というものも決してありません。というのも世界が沢山の方法で私たちに絶えず働きかけているからで、私たちは何らかの現実的な対象が契機とならない様な、大変に法外な夢想を恐らく所有しているからです。それ故に何らかのものを何時も知覚されるのですが、下手でもあると想像して下さい。

これと同じ性格は何時も十分に考えられていないのですけれども、視覚上の想像力に対してもやはり敏感です。雲とか、密生した葉とか、古い天井や壁紙のぼんやりとした入り組んだ何本もの線は、人間や怪物たちの頭部を想像させるのに大変適しています。薄明かりの時や影の悪戯も、非常に明るい光と同じ様に同じ効果を生むことを誰もが知っています。煙と炎も夢想家たちには有利です。

今は私たち自身の目が、取分け閉じられている時に、夢想に与えるものを述べなければなりません。勢い良く両目を閉じると、非常に明瞭な対象のイメージを誰もが観察出来ます。それは継続された振動でしかなく、あるいは補色での陰画のイメージでしかありませんし、疲労のせいでもあります。恐らく、私たちの網膜は決して完全に休息しないものなのです。誰もがご存知の様に、圧力や電氣的な刺激を加えると微光が見えます。そして大の読書好きは、色が付いて変化する総の様なものを見ますが、恐らくそれらは夢想の最初の切っ掛けです。私は眠る前に何度も見ましたし、これらの形は動いて人間や家のイメージに変化しますが、事物として見分ける

には注意しなければなりませんし、目を覚ました批判が必要です。熱狂者たちは自分自身の内面にある事物のイメージを見ていると言うことが大好きですが、そこで理解していることを説明したがりません。私が考える処、どんな視覚のイメージもイメージの性格上、私の外部にあります。イメージ自体にとっても外部のものでもあります。私が夢の中で散歩をしている森は、私の身体の中ではありません。しかし、森の中にあるのは私の身体です。魂の目で、あなたは何をやるのでしょうか、ということになるのでしょうか。勿論、魂の目とは私の目です。

私が事物の運動を想像する時、明らかに最も重要なことは、結局のところ私自身の運動の結果を考察しなければなりません。私は頭を動かすのがどんなに小さくても、全ての事物を動かすこととなります。誰もが確信出来る様に、私の運動は数々のイメージを混乱させるものそのものですし、両目を瞬きすれば完全にイメージを蘇らせることを、つけ加えて言いましょう。しかし、ここで最も重要な行為とは両手の動作です。それは眼前に事物が無くても描いて、何よりも自然と素描や原型となって実際の対象の中に私たちの夢を固定させます。私はここで、さ迷う鉛筆のことしか考えません。それは、その鉛筆の出会いによって私たち自身が感動するものです。その様にして私たちは、この章の主要な観念に導かれます。それは信じられる限りにおいて、私たちはでっち上げないということです。私が言っていることは一度ならずも実際に起きました。私が鮮やかな赤色を想像した瞬間と同じ時に、目の前のノートの縁が赤く見えたのです。

同じことは恐らくもっと良く知っていることと思いますが、聴覚の想像力についても言えることです。先ず第一に、風や滝や車や群衆の雑音は全てが言葉になったり音楽になったりします。列車の進行は一つのリズムを聞かせます。呼吸や血液の鼓動も又耳に作用して、ぶんぶんいう音や、ひゅうひゅういう音や、かちんという音を生んでいると言わなければなりません。取分け、私たちが話したり歌ったり踊ったりするのは聴覚上のイメージを固定して、他のイメージを呼び起こすからです。音楽上の靈感の研究はここでは触れないことにしましょう。少なくとも夢においては、私たちが聞いていると思っている声は多分、屢々私たち自身の声であり、叫び声も私たち自身の叫び声であり、歌声も私たち自身の歌声であるとして置きましょう。それと共に私たちは息や筋肉や血液によってもリズムを取ります。そこにはあらゆる出来事の交響楽があります。

触覚に関しても論じることがあります。でも、これは難しいものではありません。何故なら第一に、事物は絶えず寒さと暑さ、呼吸、圧力、摩擦で私たちに作用しているからです。第二に、触覚は生命活動によって疲労や摩擦や熱や傷害によって屢々変えられるからです。私たちは胸が締め付けられたり、捻れていたり、錐で突かれたり、鋸で挽かれた様に感じる気になります。あるいは又、胸を縛られたり、喉を手で乱暴に絞められたり、重い物で押し潰されたりすることを想像します。結局のところ軽快であったり活発であったりする運動が、まさに実際の印象を与えています。殴り合う夢を見ている人は、拳骨を振るっているかも知れません。腕を組んだり、壁にぶつかったり、断固として立ち向かったり、体をねじったりするかも知れません。その様なことが最も悲劇的な夢の源泉になります。そして、ここで情熱に触れることとなります。それは材料が豊富ですから、全てを一度に言うことは出来ません。（完）

私たちの一連の思考は、一般に私たちに起こる対象に基づいて調整されます。しかし、前に見た様に、これらの対象は多くの試行や素描や仮定の後でしか見分けられません。あそこにいる人物を私は最初、郵便配達人と思いました。その車は肉屋のものでした。風に舞う木の葉は小鳥でした。その様に私たちの各知覚は素早く探求を終えて、偽りの間違った知覚の足場となり、それらに言葉は決して止まること無く一種の正確さも与えます。それ故に、各対象に関して私は、それに似ている他の多くのもののことを自然に思考します。その意味で、それらの形は私の印象を十分に説明するものになります。類似による結合と、作者たちが見做すこれらの大部分のものを、思い起こすための源泉を探さなければならないのもそこなのです。私たちの諸観念がまさに閉鎖された部屋に隠遁して、恰も金勘定をしているが如くに、私たちの精神を結びつけると信じている誤りもそこにあります。実際に思考することとは、常に知覚することです。そして夢を見ることでさえも又、下手であるが知覚することです。もしも安易で屢々全くの弁証法的な瞑想から立ち直りたいと思うなら、この様な問題についての、作家たちの指導的な観念を堅くして曲げないことが大切です。

感覚が疲労すると黄色に対する紫色の様に、事物の補足的なイメージを知覚することも起きます。この種の事例は大変に稀有です。しかし、私たちの全ての感覚にとっては常に僅かに活発な印象も相当の行為には、謂わば無感覚にして仕舞いますし、それ故に他のものに気付くことも考えるのは自然です。その様にして所謂対照的な連想の多くが多分理解できます。或る旅行者が私に語ったのですが、アルジェリアの砂漠に疲れて目を閉じると、ノルウェーの月夜の風景を考えたとのことです。

私たちの思考において言葉とは、知覚とは別であるもの全てを自動的な流れで調整するものとして、結局のところ考えなければなりません。尤も私たちは言葉も知覚するのですから、そのことも又知覚に変わりありません。ところで、屢々或る言葉を他のものの代わりに言いますが、この失敗には二つの主な原因があります。あるいは発音するのが容易であるから言おうとした言葉に似た言葉を、つい口を滑らせて言って仕舞いますが、これは類似による一種の連想です。あるいは又、何らかの屈折や緊張から疲労した言葉の器官が自ら休息する事態に陥ります。そこからは私たちの思考も、より一層奇妙にも切断されて仕舞います。

しかし、はっきり言いますが、私たちの思考の連鎖が屢々私たちのものでなくなり、そして離れた如何なる道によっても連想させ得るものも無く、最初の思考から極めて遠くにいることがあります。それは忘却です。そして殆ど何時もそれは私たちの一連の観念が大変に気まぐれに見せるものでもあります。空間の中にしろ、時間の中にしろ、所謂密接な関係による連想に関しては、完全な記憶に関する研究によってしか理解しない素早い記憶力による出来事です。私が大聖堂を考えるには、傍らにある花屋のことを考えないと考えられません。よろしい、しかし私が古い家や、町や、そこへ行く道を考えるのも同じ方法です。そして、これらの全ての地形学上の検討には、信じられない程の多くの思考を含みます。しかし、特に連続という秩序は明らかに科学によって発見されますが、これはこれからはっきりするでしょう。確かに記憶には自動的なものがありますが、主張する程のことではありません。常に行動においても自動的なものがありま

すし、言葉においてもあります。これらの指摘は、観念やイメージが銀幕上に一つの言葉がもう一つの言葉の後に現れるものとして理解される思想の構築に対して、身を構えて警戒する読者になることを目的と見做します。その思想のメカニズムは大変に子供染みていて、記憶に関する研究も証明するのを終わりにして仕舞います。

これらの有名な連想の法則は、何も説明していないことをつけ加えて言いましょう。一個のオレンジは私に地球のことを考えさせますが、類似からは何も説明されません。何故なら、一個のオレンジは林檎とかボールとか別のオレンジに更にもっと似ているからです。そして、この事例から大変に明白なことは、所謂連想とはオレンジの皮から地球上の山々の山頂までの凸凹が現れる天文学の学習に関する素早い記憶に過ぎないことです。従ってそれは類似です。つまり本当の思想になって、ここに想像力を齎します。（完）

知覚することとは、常に想像して思い描くことです。それ故に大変に単純なものでもある私たちの知覚においても、常に暗々裡と呼べる記憶があります。全ての経験が、各経験の中に集められます。木々に沿って伸びる一本の並木道を両目で知覚することは、その並木道や他の並木道を走り回ったり、木々に触れたり、その影や遠近の動きを理解することなどを思い出すことです。そして、例えば影は太陽が影響する如く、太陽の知覚は何時も間接的に多数の経験をそれ自身に含んでいるので、私たちの全ての経験は各経験に集められると私は言うのです。しかし、この指摘そのものは、ここでは暗々裡の記憶が重要であって、本来は話すための思い出ではないことが良く分かります。この並木道を申し分なく知覚するには、私がおんな様な散歩をしたことを考える必要は無く、まして過去のおんな様な時間に散歩をしようとしたことを考える必要もありません。私たちの目の前で嘗て過去を広げることなく、現在と近い将来を明らかにすることだけしか行わない記憶を、活動的な記憶と人は呼ぶことが出来るでしょう。反対に何年も長く放浪して蘇り、そして影の王国で私たちを散歩させるために、現在の好機を捉える記憶を、夢想家の記憶と人は呼ぶことが出来るでしょう。この夢想家は全く私たちを少しも放って置きません。しかし、如何なる記憶も無く、暗々裡の記憶さえも無い新しい人間は、距離を測ることも出来ず、事物の周りを数えて一周することも出来ず、結局のところ見抜くことも見ることも出来ず、私たちがやる様に聞くことも触ることも出来ないのは事実です。記憶は従ってばらばらに分けられた機能ではなく、分離出来ないものです。

過去と未来の概念が何時か全く欠如することもあり得ません。何故なら、どんな事物も構わずに知覚の中に沢山の記憶があるのなら、この事物が他の事物の中心で思考されるか、あるいはこう言っても良いが、あらゆる方向へ伸びている無数の道の十字路となっているのも本当であるからです。この十字路は既に事物の欠如した一つの思考や、多少なりともその次の思考を仮定しています。そして、そのことは既に或る確かな方法の時間を決定しますが、それは保持すると同時に拒絶し、同一の事物であったり無かったり、あるいはもっと正確に言うと、同一の事物が欠如しているが、或る条件の時間で存在する奇妙な関係によるものです。例えば私の背後には町がありますが、三〇分の内にそこに存在することが出来ます。

しかしながら、これでは未だ言っていることが不十分です。それは可能な時間に過ぎません。実際の時間はどんなに僅かな知覚でも現れます。というのも私が事物とか場所を知覚する時、例えば私の目をそちらへ向けながらも、そこへ到達するために辿った道を思い描いて推測するからです。その様にして私の過去の存在は、少なくとも最新の所在が常に一瞬に保存されます。そのことが無いと私が存在するのは何処か全く分からないでいるに違いありませんし、旅行から帰って目が覚めた人に似ています。私にとってはその事物以前には、他の事物が色々あったのです。何時も空間は時間と結び付いていて、単に近かったり遠かったりしても抽象的なものの中だけでなく、私の実際の経験の中で結び付いています。位置、通路、運動、時間は実際に切り離せないものです。理解するに難しいことはありません。何処にいるのか知ることは、何処から来たのかを知ることです。それは数々の色々な道の中で、それらの事物の本来の道を見分けることです。未来は或る意味で私たちには常に現在になる、と言うまでになるに違いありません。何故なら

、この町から地平線まで私を引き離すのは、可能な未来でないとしても、それは距離が明示するものであるからです。従って空間の大きさは、時間との関係によってその大きさが存在するに過ぎません。それは実際と同時に可能な時間です。その可能性は位置に化けて現在も思考されていると私は言いたいのです。その上、その前後の言葉も又、空間を限定するのは明白です。作家たちは余りにも屢々私たちの思考の秩序である時間と、事物の秩序でもある空間の秩序を分離している、としか私は強調しないからです。勿論、私たちが十分に指摘して来た様に、思考と事物は一体のものであります。あるいはもっと乱暴な言い方をすれば、外部のものでしかない外部は、最早誰にとっても外部ではないに違いないのです。そこには内部の関係もなければなりませんし、それによって近いものでも遠いものでも分離出来ない世界しか生まれません。更に、これらの事物はカントの『純粋理性批判』で述べられていますし、私が判断し得る限り勘違いはありません。しかし、全てを極めて念入りに読まなければなりません。私はそのことを哲学者の初心者に言いたいと思います。（完）

私は大変遠くにあるアミアンの大聖堂のことを考えます。再び見ている様です。私は、自分自身の裡だけを探して再建します。もしも私が知覚した事物の何らかの痕跡も持っていなかったなら、記憶のこの再建が不可能であることは明白です。そして私は、何時も見分けられるこの生きた身体を私と共に至る所へ持ち運んでいて、更に突然に変わることには耐えられないので、蠟に指輪の痕跡を付けて残す様に私の知覚から一種の痕跡を保存して、私の肉体の或る部分にあると推測するのは自然なことです。この隠喩は古代の作家たちには十分でした。プラトンという人は身体の状態と、感覚とか思考の運動とを良く見分けるのを学んでいましたので、確かにこの隠喩に騙され易い人ではありませんでした。それ以来、身体の構造に関するより正確な認識によって、この隠喩が真実の顔をしたがりました。それでもそれは、哲学者が注意しなければならない点の一つです。第一に、今まで述べたことを良く把握したなら、彼は素朴な快樂主義者の些細なイメージに似て、数々の感覚から入って脳の柔らかくて形の美しい部分に刻まれるものは、何も受け入れたくないでしょう。その上で成すべき真の考察は、神経に沿って行って脳の中で起きることを間違えて認識することではありません。物質環境や事実そのものの様に分割出来ないで全てのもの様に思考されて、それらの関係と距離とお互いの外の部分と共に、その他の知覚の中央にある感覚です。そして、それらのイメージの裡で脳は世界の一部でしかなく、全てを含むことは出来ません。換言すると、脳の中には脳の各部分があるに過ぎません。これらの各部分の形と運動を自ら記すことが出来るだけです。その上、これらの形と運動は完全に思想家から無視されていて、その時の思想家は自分の印象と記憶によって世界を思考するのです。私にとって思考は単独であることが私の思想です。その外のは事物です。要するに幾らでも脳が大きくなると、何時も脳しか考えられなくなるでしょうし、世界の他の数々のことは少しも考えないでしょう。この種の注意から精神は結局のところ作品に現れます。そして作品に混入されて、古代の神々の様に組織者となり、世界の創造主になって現れます。

これらの諸原理は真の哲学者たちによって十分に知られています。しかし、彼らは記憶を論じながら、記憶を余りに忘れていることに私は気付きました。従って身体に保存され得るもの、如何なる種類の痕跡であるのか、如何なる効果を伴うのかを述べることにしましょう。生きている身体は先ずその形と取り巻かれているものに抵抗することで動くという特徴があります。その上、生きている身体は動くことを学びます。その点で恐らく二つのものを見分けなければなりません。一つは、訓練によって高揚した筋肉への栄養であり、屢々行われる運動をより一層容易になる様にそれと関係した筋肉の形を変えることです。これらは余り注意されていませんが、ここで真の痕跡になります。もう一つは、既に推測出来るもので、目には見えませんが一連の印象で何よりもより精力的に強い筋肉になる様に、神経と中枢のもので結局は脳によって作られるより一層容易な道です。以上は生きている身体が行えることの全てであり、保存することが出来るものの全てです。それは職人たちや体操教師や音楽家の処で見られる無意識的な熟練の技ですし、お分かりの様に大したものでもあります。更にそれは意識的に注意力を働かせて信じられない位に、もっと良く柔軟になって変えることにはなりますが、それはこれから述べることになるでしょう。そして、こう言っても良いのですが、そこにはまさに記憶があります。思考ではなく、一

一般的には習慣と呼ばれているものです。そこでは本来記憶と呼ばれていたり、もっと正確でより一層良く整理された時には、思い出と呼ばれている実体の無い消えている対象についての認識を扱っているのですから、もっと詳しく述べる必要はありません。身体の中に残されたそれらの痕跡は、それらをやり直そうとする行為の痕跡以外のものにはなり得ないと単に言うことにしましょう。そして、言葉はこの種の一つの行為であり、習慣によって管理されてもいます。思い出を絶えず保持する真実の対象を耳にも提供していることに注意しましょう。しかし今は、時間と連続の感覚をきちんと述べることにある、本当の困難に取り組まなければなりません。(完)

連続の本当の秩序は、例え行為の中で変えられるとしても、理論的には常に判断力によって再び発見される場合が幾らでもあります。これらに関連した最も単純で非常にはっきりした事例は、整数です。そして、この種の認識は思い出を整理したりはっきりさせる助けにならないと言ってはなりません。何故なら、少しも学識が無い人々でも、思い出をはっきりさせるのに日付が役立つからです。

私たちが所有する連続と認識も又、良く見分けなければなりません。大変にはっきりしている思い出さえも、機械的に秩序立って来る訳でないのは明白です。もしも私が三通の電報を次々に受け取って、内容的にも時間的關係もばらばらであったならば、それらの電報にどんな順番があるのか私には少しも分かりません。それ故に、その場合には数字の番号とか時間の表示を取り入れます。このことで分かるのは、連続の順番を定めるために一連の数字を使用することは一般的であって、余り事物を見分けないことです。私は限定された連続を、どんな連続に関しても、型とか模範とかに見做す様になるに違いありません。恐らくこの考えは、経験の理論に関係したものが検証された時に、明確なものを何か理解するでしょう。いずれにせよ、事実として人々は彼らの間や彼ら自身の内部で、カレンダーの一連の数字を所有していなかったとしても、思い出の秩序について際限無く議論することでしょう。

事物の中の連続と、私たちのための連続も同様に区別しなければなりません。大砲の音は発砲時の閃光の後に続く訳ではありませんが、私が遠くにいたならば、閃光の後に続いて聞こえます。記憶を扱う者にとって、少なくとも事物における連続の秩序には原則は無いと言わなければなりません。事物の秩序は先ず私たちの知覚に一種の秩序を課します。私が従うための道を示す時、共存する事物の秩序と知覚で良く決定された連続を同時に私は述べます。「私は先ず小屋を発見します。続いて四つ角と境界標を発見し、次に窪んだ道を発見します」。実を言うと、或る場所から他の場所へ行くには、一本の道だけではありません。世界を走り回るには沢山の方法があります。もしもそれがはっきりと決められた計画に対してでなければ、共存する事物の間には前にも後にも何もありません。しかし、走り回ることや運動の感覚が与えられると、共存する事物の秩序と同時に、連続の秩序が定まる様になります。それから私が旅の思い出を整理した時、リヨンがパリとマルセイユの間にあることを知っているのは無駄ではありません。しかしながら、連続の秩序を確定することは、連続している線に沿って大変はっきりした数々の点をその上に付けて、単純化された運動として正確にさせるだけです。この秩序は数字の秩序に似ていますが、連続は二つの方向が可能であり、任意の一点から出発する処が違っています。しかし、一本の線に沿ったこの種の旅行を研究して下さい。数々の点の連続が、どんなものでも構わずに逆にすることは出来ないことが、あなたはお分かりになるでしょう。或る一点から他の一点に達する前には、常に或る一点に達していなければなりません。そして私の考えによれば、この種の抽象的な旅行は、あらゆる旅行の典型であり規範でもあります。人は記憶のこの研究において理解する何らかの側面から、常に熟考された思想を作品に知覚しますが、それらの形式や適切な記号化に利用します。そして、何故人がそれに驚くのか私には分かりません。

もう一つの連続には世界の事件のものが 있습니다。ここでは過去の期間が消えています。最早

決して取り戻せません。エドワード七世(1)は一度しか王位に就きませんでしたし、死ぬのも一度だけです。私は或る試験を一度しか受けませんでした。大砲の一撃は鐘楼の残ったものを地面へ放り投げました。鐘楼の後は廃墟がやって来ます。私は崩壊前にあった時の鐘楼を決して二度と見ないでしょう。色々な事件を知って再構築するには、恐らく長い経験と、他人からの学習と、更に補足する観念が必要です。誰もが思い出すとするとこの仕事を行いますし、間違っても正しくても、可能と不可能を引き合いに出しながら自分自身と話し合うのは明らかです。ここでは更に単純化された痕跡がこれらの実験室での経験によって与えられますが、最初の状態での事物に置き戻しながら、何度でも再び始めることが出来るのです。因果関係の観念とはここでは連続の真実の様に、連続の中で示されるものであるということです。誰もが次の様に言うようになります。「それはカルノー議長の死ぬ前のことでした。何故なら私はその日に彼を見たからです」。あるいは「それは大学入試資格試験の前でした。何故なら当時はリセで勉強していたからです」。日付を確かめる術は、日付の曖昧な事件を定められてははっきりと良く分かっている連続に結び付けることにあります。その連続とは最終的には天文学上の出来事としてのものです。この種の手助けが無いと私たちは生活の最も重要な出来事について迷うばかりで、良薬も無いだろうと私は思います。予想してみましょう。私たちが連続を経験の中で知覚するのは、連続という理論上の観念によるものです。つまり原因から結果への関係によるものです。あるいは私たちの思い出は、無意識に保存されていて、私たちのための事物の様に常に同一の秩序の中で数珠つなぎになって次々に戻って来ると主張しなければなりません。けっしてそんなことはありません。実際には私たちの思い出は気紛れです。それらの本当の秩序は、真実であろうと誤りであろうと観念によって絶えず思い出されるに違いなく、多少なりとも進歩的な科学に込められているのです。いずれにせよ科学には込められているのです。

自動作用は発動する記憶であり、絶えず利用されている一連の補助的なものを私たちに良く提供していると理解して下さい。しかし、私たちが確信しているものの数は少ししかありません。その様なものには、数字の順序、一週間の日々、月々、アルファベットの文字、プリズムの色、音階、一連の調べ、歴史の主な出来事の順序があります。私たちがそれらの順序を定めて、間違えないと見做して再構成する苦しみには、私たちが知覚した秩序において過去の事件を巻き戻す、自然に生まれた儘の全く直感的な記憶に欠けていることを良く分からせてくれます。

要するに、私たちにとっての連続は真の連続によって決定されます。真の連続は、原因の観念による連続の論理的観念でしかないと言えます。それらの重要な観念は、この章では明らかにすることは出来ません。でも、紹介して述べなければならなかったのです。(完)

(1) エドワード七世(一八四一～一九一〇)は、英国とアイルランドの王(一九〇一～一〇)で六〇歳に即位した。フランス好みで仏・英政治協定(一九〇四)を成立させたり、ドイツ包囲政策を採用したりした。

今まで述べて来たことが目指した明らかな結論とは、時間という本能的な認識が何時も規則正しい連続の何らかの観念と、教育上の何らかの救済を仮定していることです。しかし誰もが毎日体験しているこの認識以外に、私たちは自分自身の時間で、あるいはもっと正確に言うと私たちの持続とか老化の、より一層親密な経験を持っていないかどうか自問しなければなりません。この検討は純粋心理学とは何か、心理学者たちと主知主義者と呼ばれている者たちとの討議に関して何らかの観念を与えることが出来ます。

私はそれ故に外部の対象を考慮に入れたくありませんし、少なくとも私が自分自身と共に沈黙考して体験するものを知りたいと思います。そして、この夢想的な思考の中で私は又、きちんとして日付の書かれた思い出、つまり対象を形づくったものは何でも消したいと思います。私は感じているものを考えます。それが何処から来て何を意味しているのか知りたくないのです。短い時間でそこに達することを人は願うことが出来ます。その時は何でも混じっていて、対象には薔薇の匂いも無いし色彩もありません。私の裡には、私にとっては、私のためには、印象しかないのです。従って私は唯一の主体の前、又は所謂純粋に主観的なものの中にいるでしょう。少なくとも私はそれに近いものになります。そして私は最早、対象の変化や運動のことは考えません。まして天体や掛時計のことは考えませんが、それでも私には時間に対する直接的な感情を持っている様です。まずは、もしも私の印象が変われば、最初の印象は全体が全て過去の性格をとって、そして直ぐに突然やって来た印象によって過去の中で、いわば拒絶されます。しかし、私が感じているものを考えれば、まさに如何なる変化も無く、この反省だけが他の全てのものを少しは明らかにします。そして他の全てのものと共に新しい現在の時間を形づくります。反省の無いもう一つの状況は直ぐに過去の中へ移行します。前方から後方へ移行する瞬間的時間のこの鎖は、直ぐに一種の闇夜に陥ります。

もしも私がこの経験をしなかったなら、時間のことを私に話しても無駄であるとも言って仕舞いましょう。というのも、運動は決して時間のものではないからです。私の腕時計の針は場所を変えて運動していますが、時間を描いているのではありません。時間に固有の性格は、取返しがつかない変化です。過ぎた時間は最早現在であることは出来ません。それと同じ印象が戻って来ても、私はそれを既に感じた者です。どんな春も、既に他の色々な春を体験した人にも歓迎しにやって来ます。その意味ではどんな意識も、あらゆる生き物が年を取るのを見る様に、年を取るのには仕方ありません。その様にして本当の時間の運動は、それ故に私たちにイマージュしか与えません。そして、この時間は私の裡にしかありません。私が身体を想像すると、それらの部分が全て最初の状態に戻って来るのが分かります。そして何度でもその様に戻るのが分かります。従って何も過ぎ去ったりしません。しかし私にとっての証拠は、私が持っている二番目の印象が、最初の印象の代わりではなくて、つけ加えられているのです。私は蓄積するから年を取るのです。

多くのことを精製させるこれらの指摘は、時間に関する思考の完全な描写に貢献します。描写の材料になります。そして時計の針によって秒が走り回る様に、時間が私たちの裡に並置するものではないことを読者に知らせるのは実際に正しいのです。しかし私が描きたかった純粋な感情

による生活は眠りに向かうこと、つまり無意識に向かうことも又理解しなければなりません。私たちはそれを把握出来ません。空間と時間から引き出された隠喩、つまり対象によって、それらの形に基づいて描写することしか出来ません。従って対象は、その明瞭な部分と変化と共に、意識の統一性がなければ、決して私たちの前に広がって行かない様に見えます。何故なら、もう一つの事物は事物でしかなく、この私が全てであるからです。それに反して主体の統一性は、対象の知覚がなければ決して現れません。カントの最も一貫していて困難な思索が齎されたのもそこです。そして人が大変に心を打った言葉によって、自分自身のことしか思い出さないのも真実の様に私には見えます。しかし事物しか思い出さないのも真実の様に見えます。事物の真実は継続した内面の感情に唯一の方向を与えながら、運動のイメージと全く同一の方法は、私が腕を伸ばす時に感じるものに唯一の方向を与えます。結局のところ私が意識する限り、私とは常に理解力のことです。そのことは少しは余りに便利ですが、大変に子供っぽい分割を取り除くことに向かうしかありません。それらに従って私たちは、例えば時々思考することなく感じる事が出来ますし、時々感じる事なく思考することが出来ます。分割すること、合体すること、それを同時に行うことは、哲学的探究の主要なる困難です。（完）

先ずこの表題を批判し、時間は決して一つでなく、数々の時間があると言うなら、何らかの哲学的精神が明らかにされると思われます。一人ひとりにとっての内面の時間と、対象の中にもその様なものとしての一人ひとりの時間しかないことを理解して下さい。これらの考察は、考えを始めるために、そして先ず時間が太陽とか時計とか星々の様に規則的な運動から成っているという酷い誤りから免れるためには悪いものではありません。だが、そこまでにしておくことだけしか出来ません。私は、この時間という言葉の元に思考するものを述べなければなりません。そして私たちは、全ての人々や全ての事物に共通した唯一の時間を思考します。例えば光よりも速いという観察者の或る運動に従って、変わり易い局部的時間を望む現代の物理学者たちの中でのより一層正確な逆説は、もっと正確に言うと、唯一の時間という概念に属するものになっています。何故なら、それは結局私たちには二つの行動に同一の時間を認める絶対的な方法は無いです。しかし、もしも私たちが全てのもものが同時性の中にあるとしか分からなかったとしても、そのことはまさに意味の無いものであるでしょう。

腕時計の秒針が文字盤の上を進むのと同時に、一秒ごとに何らかの事物が至る所を通過するのですが、それは前でも後でもありません。私が同時性と呼ぶ二つの変化の関係を、経験の中で私は最悪の場合には決して発見することが出来ません。しかし私の中の一つの変化が、至る所で他の色々な変化や出来事を生まないのを同時に考えることしか私は出来ません。同様に、他のものの前にあることと後ろにあることが、私においては同時にあると考えることしか出来ません。私は、遠くの星雲が凝縮するとか稀薄になったりすると同時に生きています。星雲にも私にも、共通している星雲にとっての一瞬間があります。もっと正確に言うと、あらゆる瞬間が我々の両者にとっても全ての事物にとっても共通しています。同時に唯一の時に、要するに時間の中で全ての事物は生成します。時間が一方のために中断するとか停止するとか、他方のために継続しているとか考え様とするのは不条理です。これはカントが、二つの異なる時間は必然的に連続するものであるとの、この種の公理で説明したものです。従って二つの空間も三つの空間も、唯一の空間の部分部分であって、共存した部分であるので連続したものです。あらゆる方法でこの思想を点検して再発見して下さい。そして、この哲学的方法もここで把握して下さい。それは自分に代わる他のものを考察しない様に十分に注意して、私が一つ概念の中で思考するものを知るために考えることです。それはまさに、或る時間は他の時間よりも速くなったり遅くなったりして、他の時間よりも速く進むことも意味する全ての人々に起こることですが、彼らは運動のことを言っているに違いなく、時間のことではないのです。何故なら運動には速度があるからです。あるいは寧ろ色々な運動は速度で比較出来るのですが、同一の時間の中にあるからです。しかし、時間の速度とは良く考えてみると、決して許せるものではありません。何故なら二つの時間の色々な速度を比較するためには、もう一つの時間が必要になるからです。これらの二つの時間とは、数々の時計であることを言っていますが、真の時間は唯一の時間であり、そこで全ての運動が比較され得ることになるからです。

或る意味で時間についての思考は、哲学者の本当の試金石であると言えます。何故なら、時間には決してイマージュが無く、感知出来る直観も無いからです。従って余りに重大な誤りですが

、全く時間に尊敬が欠けていなければならないか、同時とか前とか後とかいう純粋な諸関係だけで把握しなければなりません。空間も同じ種類の軽蔑の機会与えていると言わなければなりません。というのも、空間のイメージも又、同様に決して無いからです。本当の直線には部分も決してありませんし、自ら描くことも決してありません。空間には大きさも形もありません。空間によって大きさと形を持つのは事物です。そして、ポワンカレの有名は逆説がある所以です。

「幾何学者は、チョークで幾何学を行う様に空間で幾何学を行う」。彼が言いたいのは感知できる空間です。大空には大きく広がった青空がある様に純化された空間があります。そして、この想像上の空間は、違いの無い運動でも時間で無いのと同様に、空間ではありません。この運動は、他の全ての運動と同様に、時間の中で行われます。この運動は、空間と時間の二つの変化の同時性を最も良く定めるために、単に便利なだけです。

時間は決して否定しません。始めも終わりもありません。どんな時間も時間の連続です。時間は持続していて分割出来ません。運動によって時間を表す安易なイメージから解放されることでしか、まさに明白にならない命題がそこにあります。例えば、時間が分割出来ない瞬間から生まれるかどうか自問することは、運動を時間の代わりにすることになります。それは既に運動のイメージになっているのです。というのも運動は、偶然の出来事の連続と同様に理解力にとっては別のものであるからです。更にそれは恐らく、空疎な弁証法が永遠を捏造して喜ばれる時間を具体化したためです。ここでもう一度、観念と事物とを見分けなければなりません、両者を分離させることではありません。私たちはその様に思考しているのです。そして、私たちが普通の判断力で思考するものを正確に認識する重要さは些細なことではありません。まさしく時間が空間と同じ様に一般的な経験の一つの形式であると結論付けましょう。これらの真実は新しいものではありません。しかし、それらを正しく理解することは常に新しいことなのです。(完)

これらの言葉は些か不正確ですが、何となく習慣的に使われています。そして、主観と客観という二つの要素の認識を、少なくとも自我のものである形式も関係も無くこれらの印象を、そして結局は秩序立って表された真実の世界全体で対象を、別な言葉で如何に説明するのでしょうか。もしもその考察が結局のところ、ここで弁証法的誤りから身を守る必要が無いとするなら、それは言葉が原因であって、読者もご存知の様に、それは私たちの夢想や夢の骨格を作っていると私が理解すれば十分です。私が語りたいのは、一人ひとりの裡に時間を繰り広げることを思いながらも、自分だけの思い出や隠された思想の使者を用心すること無く論じている多くの哲学者たちの内面の生活です。しかし、お分かりになった様に、それは何らかのイメージで飾られたり、あるいは寧ろ何らかの実際の事物で飾られて通りがかりに理解出来ても勘違いして、つまり間違っただけのものに結び付けた話の展開に過ぎません。それらは常に不完全な知覚であると言っただけで、私たちが言わねばならないことは全て言った夢のことを考えて下さい。何故なら、私の両眼の上の太陽光線は、本当の世界に目覚める前に私に幻想的光景とか火事とか閃光を想像させる様にさせて、私は直ぐに言葉を書いて完全なものにして私の物語はその後で完成する様になるからです。夢を語りながら、もう一度夢を作り上げているのは明白です。いずれにせよ、その様にして内面の生活は発展して何時も対象を表した印象を作り出しますが、完全な知覚にまで行くことはありません。あるいはその時は目覚めることになります。目覚めることとは、両目と両手の動きで事物の真理を正確に探求することです。私たちの夢は、探求の欠如である知覚の欠如と、批判力による事物の本当の存在の欠如との間の通路でしかありません。それらの怠惰なエッセイが夢なのです。そして、情熱による正確な認識を目指してこのことを良く理解することが極めて重要です。

又、この内面の生活が如何にして作られるのかも良く見て下さい。幽霊が本物とと思っている限り、私は自己の外部にいると考えます。事物の秩序や本当の対象を出現させているのと同じ批判力による以外に、私の裡に入って来ません。事物の真理を推測する、測定された一般的な時間の考えによるのでないとしたら、私が眠ったり夢を見たりしたことを如何にして知るのでしょうか。すると私の思い出は実際の整理された対象になります。それは私がこの世で何時も考えているものであり、過去というよりも寧ろ離れて遠くにあるものです。私が見た町のことを思い出さず時、私はその町が他の人々にも存在していると良く考えます。そして、もしも私とその町は破壊されているのを知ったなら、その廃墟が存在していることを考えますし、そこに一つ一つの石とか少なくとも一つ一つの石の粉塵を再び見ることも又考えます。何も失うことの無いこの観念は、ご存知の様に厳格な思想には大変に重要ですが、既に不勉強な人の思い出を支えるものにもなっているのです。時間の記憶が、場所の記憶に結び付けられることを幾ら言っても少な過ぎることはないでしょう。私たちの歴史とは、現実のこの世の旅です。そして私たちの変化は、外部の変化や対象の変化の中で思考されます。そこでは少なくとも位置を変えながら全てのものが失わずにあります。私とは、真の知覚による唯一の連続による自己です。そこでは思い出の原理があり、他のものも引っ掛かっています。最も洗練された人々が先ず事物とか、それらの破片を探しながら自己の昔の感情を求めるのは当然のことです。私はこの世を通して自己を思考するだ

けです。それは、自意識が外部の事物の存在を十分に証明していると言って、カントが大変曖昧な定理の中で述べていたことです。カントが説明したいのは、いわば主観的な外観による生活から実際の対象へ飛躍することは決してありませんが、反対にそれらの外観が現れるのは実際の対象によるしかないということです。例えば、実際の立方体を見るには透視図によって見るしかないのは極めて明白です。私がそれを見るための方法は、常に立方体があるものとして思考して推測するのであって、見ている儘ではありません。他の処と同様にここでも私は、哲学的考察を用いなければならない難しい点を示すのは止めることにします。対象の無い思想は、規律の無い思想で単にお喋りの様なものです。そして判断力の無い経験も又、事物を把握出来ない様なものとして、この二つの真理は科学の歴史が十分に証明していますが、一般には人に教えることがなくてびっくりさせる様になることを良く記憶に留めて置きましょう。（完）

第二部 系統だった経験

ご存知の様に、既に単純な知覚には或る一つの方法がありますが、暗々裡です。そのことによって、誰もが予め分かるしるしを解釈する手段が見出されます。その様なものには足音、錠の音、煙、匂いがあります。そして事物や距離を知らせる、輪郭や遠近は言うに及びません。これらの認識は真の探求によって獲得されます。それは偶然性を排除しながら何時も試行を繰り返すことに存するのですが、殆ど何時も逸れる気持ちも無く、変わらない関係の儘でいるよりももっと一層目立った一種のしるしによって、まさに屢々獲得されています。言葉の無い認識が言葉以前に殆ど全て獲得され、その認識は一生を通して自己を完成します。

そこでは通常の仕事が多く生まれます。船乗りは大変に遠くの船を見分けますし、海水の色によって流れや浅瀬も見分けます。彼はさざ波を見て、突風の来るのが分かります。同様に空模様と季節を見て、雨や嵐を予測出来る様になります。農民も他の色々なしるしを見て予測が出来る様になります。しかし今日では実を言えば船乗りや農民には、決して理解しない観念の伝播と教えられた認識が混じり合っています。そして、それらの外来の助けは寧ろ探求の道を閉ざしています。農民たちが惑星や星々を見ても今では全く知らずにいて、少しも注意することもないと私は気付きました。彼らは暦の中に持っているのです。グロア島の漁師たちは水深を測って前進するための知識を持っていますが、それにはびっくりさせられます。ところがコンパスにしても、彼らは学んだ方法しか持っていません。例えば、港町のラ・ロシェルへ行くために取らなければならない角度を知っているのに、それに隣接するもう一つの角度が彼らの行く処の漁場へ直進する様に導くという観念を決して持たないのです。一枚の地図を利用するには観念から観念への長い回り道を辿らなければなりません。そのためには独りの人間だけの経験では十分でなく、事物を示して語る教育でも不十分です。そこには書かれたものと明示されている言葉が必要であり、それは幾何学の言葉です。

職人の経験は、取分け加工して作られた対象や道具を知るのに有利な二つの状況に出会う場合には、より一層本当の科学の近くに導いている様に見えます。何故なら加工された対象は、例えば机は対象と同じ形やその使用によって自然と、十分に導かれて継続されている経験の契機になっているからです。そして、この対象は既にいわば一つの抽象になっています。しかし加工された道具も又、より一層抽象的であり、その形は既に幾何学的で力学的な関係を十分に表しています。車輪や滑車やクランクは、楔や斧や釘の様に、有史以前の何処かのアルキメデスが考えた槌子や円や平面を既に与えています。今でも道具は不変の状況を表していて、困難な原因を究明することにおいて既に精神の重荷を軽くして案内しています。この広大な問題を踏破したい人々は機械的な理性によって各道具の誕生と改良を、大鎌の刃の曲線までの文献が極めて少ない歴史を、明らかにするために良く考察しなければならないでしょう。

全ての仕事と同じ方法で教えてくれないというのは重要なことです。そして、私はここで三つの要点を見分ける様に配慮します。一つ目は職人の仕事です。何故なら、それは何時も付随的な状況を除きながら試行と修正を行い、直ぐに本当の経験に基づいた法則と決定論者の観念へ到達するからです。二つ目は農業で、より一層模索的で慎重です。何故なら、それは雨や雪や雹や霜という主要な原因に働きかけることが出来ないからです。従って農業にとっての希望は、職人の

希望とは別ものです。恐らく、より一層待つことや祈ることが加わって来ます。そこから、より一層宿命論的で詩的でもある宗教となって、大空の中に幾つものしるしを探します。三つ目のグループは、犬や馬や牛や象という動物を調教する人々の仕事です。それらの仕事に、指導者や弁護士や裁判官の仕事を私は加えますが、決して皮肉の意味はありません。というのも説得することと調教することは大変に似ているからです。取分け小さな子供たちの教師も、このグループの仕事と認めます。ここでの方法は盲目的に進んで、精神は自然の真理によって狼狽させられます。いずれにせよ、結果と原因は深く隠されていますが、それ故に或る方法が執拗さによって、例えば或る言葉を執拗に繰返すことで、屢々良いものになります。相違とか驚きとか気紛れとか不意の成功によっても、ここでは恐らく物神崇拝者の思想と魔術がまさに強くなりますし、模倣の力によってしるしや言葉も強くなります。

自分自身の仕事において精神は、最初の真理と誤りを常に読まなければならなかったと言えます。農民は天体の運行や四季の変化に一番良く気付きます。そして職人はより一層正確な関係、取分け幾何学的で力学的な関係を見付けますが、多分非常に精神を制限します。そして結局のところ動物を調教する者は、判断力と意志からと言いたいのですが、お互いが全くの他人の関係で、一緒に農場を管理するまで成功することによって大胆になります。それは未開の獵師たちが追いかける動物の名を小さな声でも決して呼びたくない様なものです。そして私が把握するのは、一貫して大胆な魔術師たちの誤りが職人たちの明瞭で確実なやり方を生むよりも、精神の本当の力強さをより良く示すことです。何故なら、人々は深淵に橋を架けながらこの様に考えるからです。その様に考えるのは有益でさえあると私は言います。（完）

## 第二章 観察について

---

余りに根拠が無くて軽々しい観察の精神を論じることから逃れるために、兎に角も三つの主な仕事の大変自然な観念に従えば、観察するのにまさに三つの方法があります。一番古くて一般的と思うのは、魔術師の観察です。それは常に人間とか馴れた動物を言いなりにさせて従順にさせる様に導きます。誰もが、そして子供さえもが、少人数の仲間裡で魔術師に成りたがっていることに注意して下さい。この配慮は何時も欲望によって齎されます。意志によって調整されますが、常にこの配慮に熱意があります。それは祈りであり、命令です。医者、魔術師、指導者は自然にこの見方を持っていますし、自分が求めているものをついに生んで大きくします。人間の世界では、いや家畜の群の中でさえも、熱烈な祈りと確固たる希望によって絶えず奇跡が生まれます。そして、この物理学が最も古く、全員にとって最も重要であることを忘れないで下さい。例えロビンソン・クルーソーにとっては必要ないとしても、結局は誰にとっても一番大切なものです。というのも、子供が手に入れる手段は祈りしかないからです。そこから沢山の世の中の制度が、馬鹿正直にこの人間の世界によって味方と敵を作り出します。自己から全て引き出されるこの大胆な考察は、海が船を支える様に、あらゆる探究を支えます。デカルトは〈神〉の中に物理学を求めました。私が引用するのを好むこの〈理解力の王〉の肖像を思考する時間を持って下さい。あなたは力強い率直さをそこに見るでしょう。勿論、申し分の無いデカルトを引用するには、最高の準備が必要です。少なくともここでは、如何にして思想が祈りから生まれたのかを理解して下さい。

野心的な思想と対照的に、私は労働者の思想を直ちに書きます。それは自分が作るものしか観察しません。現代の物理学を支配している確かな方法は、或る意味で祈りを押し潰します。何故なら、ここで疑問に身を置かせるのは最早事物だけです。そして、事物は何に答えるのでしょうか。作家たちが良く見た様に、少なくとも否定することです。少なくとも反駁することです。機械、艇子、滑車、車輪、斜面は力学が未だ深く謎に隠されていた時にも、全てが広く知れ渡っていました。プラトンが全ての手作業を奴隷のものと呼びたがっていたことは、恐らくこのためでもあります。無線電信の歴史を見れば良く分かる様に、実践が勝利することで諸観念が直ぐに道具の仲間扱いにされるのは大変に明白です。ところで、科学実験がそれ故に方法論の女王になることを余りに簡単に認めるこの考えには抗って戦わなければなりません。実験に基づく探究においては、単に行為や道具の役割しか成していなければなりません。勿論、手と道具は同じく停止しますし、精神が些細な自然を良く調べなければならないのです。

この様にして純粹で簡潔な観察の観念に導かれましたが、それは先ず空模様についてだけを訓練する様になりました。何故なら人間はそれを何も支えられないからです。そこで人間は事物の観念そのものを、無言の考察と疑問によって形づくるのを学びました。意志が無い訳ではなく、執拗さも無い訳ではなく、正しい情操の感情も無い訳ではありません。事物はそれ以上のことは何も出来ませんでした。事物の真理が行為の全てでしたし、命令によるものです。天球や極地や子午線を発案した者は、この世界を何も変えません。しかし、そこからは秩序と法則を既に現せています。或る意味で彼は召使いであり、又或る意味では調教師です。以上は、不動のタレス(1)の二重の運動です。(完)

(1) タレス (前六二五頃～前五四七頃) は、古代ギリシアの数学・物理・天文・地理・哲学者であり、七賢人のうち最も有名で古い。

観念も無く観察する者は観察しても無駄である、と誰もが知っていますし言っています。しかし一般的には事物から余りに遠くへ、指導する観念を探しに行きます。あるいは機械的な規範として事物の傍らでより良く探しに行きます。知覚の分析が、事物そのものを観念によって限定するための準備を私たちは既に行いましたが、偉大な作家たちが大変良く言っていた様に、その観念は事物の骨組みであり、骨格であり、形式だったのです。そのことは数々の事例によって、より一層明白になるでしょう。ヘルムホルツ(1)は見事な『音響学論』の冒頭で、海の波や船の航跡、取分け波が交差し合う橋で、長い時間観察しに行くことを勧めています。ところが無邪気な観察者には、波が波紋の輪を広げて水の上を走っている様に見えます。でも、それは既に外見通りに見る知覚を前提にしている、間違いであることに気付いて下さい。何故なら注意深く考えるならば、ポンプや花器の水に固体を勢い良く沈めると生じる結果を誰もが知っているからです。水は遠ざかりませんし、その周辺を持ち上げます。そして山の様になっても止まることが出来ずに再び降下して、そこに物体が落ちると同様の結果を再度生みます。つまり固体の周りの部分の水を持ち上げます。或る時は水面の上に、或る時は下になって、重力の方向に水が均衡をとる様に次々と行われます。理解力をもって、この新しい知覚に達しなければなりません。それは外見をより一層良く整理することです。これに倣って波の交差も知覚することです。二つの運動が調和し合うと、或る地点では時々水が動かない儘になります。しかし、この静止は二つの運動が共にすることでなければなりません。私が言うのは、目にとっては波の二つの体系があることです。それ無くして真実の対象をあなたはどんなものでも決して知覚しません。目覚めて最初に見たものとか、怠惰な夢の様に臃気な外見を知覚するだけです。その上、この秩序は維持されているに違いありません。少しでも甘えたと直ぐに、子供や未開人の物理学の様に全てが混乱します。私はそれを或る日、アヌシーの湖(1)で気が付きました。石で出来た波止場で私は反射する美しい波を観察しました。しかし、理解力の秩序は保持されて、用心深くなっていなければ真実が知覚されることはありませんでした。私が波を走らせて置いた儘でいたなら、直ぐに波の考察は最早奇跡になるしかありませんでした。法則は対象と同時に消えていました。

もう一つの事例は、内在的な観念のことをもっと良く把握させてくれるでしょうが、それらの観念のみによって事物の明瞭な表象が可能になります。天体の外見は、宇宙形態論で認められる秩序のものとは大分違っております。しかし知覚される事物が、良く行われる描写的な言葉の様に、もしも観念が単に論述だけであると考えたならば、大変な誤りです。日々の星々の運行、東方にある月の変化、太陽よりも遅い変化、或る時は太陽の前にあったり、或る時は後にあたりする金星の出現、軌道を逆行する他の星々の運行、そのどんなものでも屢々雲に隠れて、常に太陽の光からは目に見えない部分があります。目に見えない形式の体系がなければ、記憶によって明瞭なものは何もありません。これらの形式の関係によって、どんなものでも秩序立っていて測定されます。私は、全然存在しないが少なくとも思考されて仮定されたこの天球のことや、地球の軸のことや、両極のことや、子午線のことや、赤道のことを語りたいのです。それらは建築物の丸天井や柱や半円形のものの様でもあります。それに応えるのは職人の手による、もう一つの幾何学です。振り子で測ることのない日時計の棒と文字盤と子午環と分割された円であり、

腕時計であり、その外の色々な機械です。それらのものは、どんな産業もあらゆる科学も数々の観察から、如何にして最も簡潔なものに向かう幾何学と共に一点に集まるのかを明らかに見せてくれます。その時は人々が月の運動を単に示すために、どれ程の莫大な労力を止むこと無く行わなければならなかったかが良く分かります。そして、それは又事物の実質的なものである内在的な幾何学によって、私たちが月をその距離で知るのであり、太陽と惑星とそれらの運動を知るのです。例えば、惑星の運動を再発見して結局のところ保持している外見を知覚するためには、外見の姿が変わって行かなければなりませんでしたが、それは幻想的なものではないからです。それは重力まで及びますし、それを良く理解するには外部の構築を大空の事物にすることではありません。事物の骨組みそのものにすることです。あるいは寧ろ、これらの事物が事物であることを生む形式であって、空虚な夢ではないのです。その形式は一般的言語が大変に正しく言う様に、外見の中に事物を再発見するのを可能にして、最後にはそこに自らを取り戻して再発見します。

さて、身近な最も簡単な例を見てみましょう。落下する石です。もしも私が見る術を知らないと、それは両目に対する一つの影であったり、あるいは私の身体の震えでしかありません。しかし対象として見る落下は、全く別ものです。というのも、その時は私とその運動と軌道と状況を自ら描かなければなりませんし、そこでは私が慣性と速度と加速を思考する形式がなければ出来ないからです。ゆっくりとした落下にしる、測定された落下にしる、科学実験はそれを助けます。しかし職人のやり方は、決して形式を生み出しません。反対に、それは形式を仮定するのであり、あるいは盲目的な模索に過ぎません。身体の落下は、ガリレオが現れるまで最良の精神にとって悪しき夢の様なものでした。形を成さない経験は、取分けそれらが増大すると単独の事物よりも、より一層騙すものであることが十分に物語っていました。それらの経験が理解力に贖金で支払うことは、統計が間違っているのです。慣性と速度と加速と力と数々の分割出来ないものであって、目に見えずに思考され仮定されるこれらの関係が生まれることは、思考された距離が地平線や鐘楼や並木道を知覚するために不可欠であるのと同様に、落下の知覚にとっても不可欠なのです。そのことは常に事物への考察によるのです。又は少なくとも知覚と、その知覚を想像するための不断の努力によります。この世界は決して法則以前に与えられておりません。朝と夕に現れる二つの幻想的な星は、少なくとも他でもなくケプラーの法則に基づいて唯一の金星に結び付いて一つになる様に、法則が発見されるに応じて世界になり、対象になるのです。従って、観念によってこの世界は対象として存在しております。そして結局のところ、太陽とあらゆる天体によって、そしてあらゆる光学によって、樹木の影は樹木の影である様に、外見は外見になります。もしも無学の人々が考えてもいないことをより上手く言わなかったなら、これらの関係はもっと良く目に見える様になるでしょう。（完）

(1) ヘルムホルツ (一八二一～一八九四) は、ドイツの物理学・生理学者である。

(2) アヌシーの湖は、フランス東部のオート＝サヴォア県の山中にある湖で、レマン湖の南方にある。

## 第四章 類推と類似について

青銅製の馬は本物の馬に似ていますし、青銅製の人間も類推されます。この例においては、類推という言葉には古い意味が含まれていることが分かります。その言葉が示しているのは、感じるためにしろ行動するためにしろ、同じ様な身体を持っている性質の共通性ではなく、まさに理解力だけで語る関係の類似性です。それ故に最も完全な類推は、最も隠されているものでもあります。自己誘導と一般群衆との間には如何なる類似が無いとしても、類推はあります。坂道と螺旋の間に殆ど類似が無くとも、類推はあります。螺旋と風車の間、歯車と梃子の間、電流と水道管の間にも類推はあります。しかし、ここでは理解力の代わりに想像力を用いることを心配して、何らかの類似を捏造しない様に用心します。落下と重力の間にも同じく類推があります。酸化と燃焼と呼吸の間にも類推があります。発熱反応と重量の落下の間、化学的に不動の物体と地球に対する重量の間にも類推があります。磁石と電気磁性試験器の間、ヘルツ波と光の間にも類推があります。円錐曲線と二次方程式の間、接線と微分係数の間、放物線と一連の正方形の升目の間にも類推があります。これらの纏まりの無い事例を列挙するのは、類推の広がりとその問題の難しさを分かって戴きたいためです。同様に、際限の無い発展が無くては提示するのが不可能な、類推の体系という観念から逃れるためでもあります。

これらの事例を考察して先ず理解出来ることは、類推には時々如何なる類似もありません。時々精神を惑わせたり、一つの証拠のために比較を行う本来の大雑把な類似によって複雑にさせます。同様に、確かな類推はファラデー(1)の仕事が良い例になっていますが、謂わば良く準備された経験によって確認されます。その他には力強い観察者によって把握されますが、ニュートンが月は地球に落ちると言いたかった時の様に、新しい幾つもの事実を示している単純な何らかの形式によって、その時は常に再建されます。結局のところ、その他には紙上の点と線の様な適当な対象によって、純粋な状態に殆ど組み立てることもあります。簡単な考察によってさえも、類推の源泉と規範は最も高度な数学にあります。そこでの類似はその時には消去されて、様々な対象の相違の中での関係の同一性以外のものを、最早存続させない儘であることさえ確信し得るのです。幾何学者の図形と代数学者の記号を対象と呼ぶのを、私はここで認めることを知らせなくてはなりません。そして幾何学が類似によって、間違った証明を想像力に与えているというのも本当です。図形の厳格さによって申し分なく観察者の両目が訓練するのは、恐らく最も高度な数学においてだけです。その次は物理学者ですが、最初は数学者です。マクスウェル(2)は大きな球状の塊で小さな球状の間の誘電束密度を表した時に、これらの罨を知りました。この力学の規範は余りに粗雑でしたので、誰も騙されませんでした。想像力が自分の道を合流させないで、理解力と共に確かな方法で歩む様に、恐らく想像力を楽しむための技術があるのですが、まさに隠されているのです。

(1) ファラデー(一七九一～一八六七)は、英国の物理学者。

(2) マクスウェル(一八三一～七九)は、英国の物理学者。障壁に開けた穴から運動エネルギーの大きい気体分子を一方向にのみ通し、マクスウェルは磁束の慣用単位でもなっている。

諸法則に従う理解力の形式である仮説と、多少なりとも調整された想像力の働きである推測とを最早混同しない様に、読者の精神は恐らく今は十分に準備されています。裁判官がこの被告は犯人であるとか、窓から逃げたとか、足跡は彼のものであると仮定する時、裁判官は推測しているに過ぎません。しかし、殺人を犯した拳動とナイフの位置が機械的に結び付くと、二人の足跡による動きを復元しながら、一種の仮説を立てます。というのも、運動は常に精神のものであり、常に再建するからです。それは変化の形式になりますし、際立った変化は運動の中身になります。しかし真実の仮説は、この種の探求においては稀有なものです。犠牲者を眠らせたのはクロロフォルムであると医者が仮定する時、医者は推測しているのです。しかし、分子が交わり合っただけでクロロフォルムが神経に作用している考えが生まれると、その時は本当の仮説になります。このことでお分かりの様に、推測は存在を設定し、仮説は本質を設定します。そして、学問は余りに多くの仮説に溢れたものでしかないことがお分かりになると思います。存在は決して設定されずに、単に確認されるだけに違いないときっぱりと言いましょ。この点を少しじっくり思考する者は、最近の優れた書物までも両者が混同されていることを発見するでしょう。

仮説が真実か誤りかを問うことは、その円が存在するかどうかを問うことです。存在するものが円形によって把握するのは車輪です。あるいは楕円形によって把握するのは天体です。そして先ず、球形とか赤道とか子午線とかの諸形式によって定められます。この考えをあなたが受入れたくない間は、マクスウェルの軸とベクトル、その線と管が、同じ種類の助けを齎さないかどうか、その距離がもっと簡単に遠近法や視差の効果をすっかり説明する様になるのかどうかを自問して下さい。

何度も無視された力は、更に良い例を示します。勿論、力はその体系につけ加えなければなりませんし、体系の外では少しも意味がありません。何故なら直線は小石から出発しないで一点から出発しますし、畑を区切らないで平面を区切るからです。遅くなったり速くなったり屈折したりしない運動は、少しもありません。厳密に言うと、その様なものは少しもありません。変化の無い運動とは、単に惰性で作られているとするなら、一つの観念に過ぎません。それは結び付きの無い運動であり、それ故に何処にもありません。しかし理解力だけがそれを要素として仮定します。それは力学上の直線です。ここから、この世には既に何も把握されない速度が定められます。しかし待って下さい。速度は、速度の速度、即ち加速度を定めることを可能にします。そこから定められるのは、不変と定めている物体に対して等しいとか等しくないとか、測定可能な物体が定められます。以上は落下や重力が見せてくれる様に、関係がある沢山の運動を把握するのに必要なものです。しかし何時も源泉は同じですが、これらの形式とか恐らく他の形式がなければ、一列に並ぶことも円を描くことも無い数々の天体の外見を、羊飼いが見定める術を知らない実際の運動の中で最も単純なものも最早把握する術を知らなくなるでしょう。

さて今度は、常に二つの動くもの間であって、事物ではなくて関係であり、少しも腕の努力が無く、衝動も内部の緊張も如何なる事物の中に少しも無い、この力を考えて下さい。何故なら、作られた作品においても余りに一般的でもあるこれらのイメージは、石の重さが落下する状態として、石の中にあって感情とか思考と言った方が良い様に言われていた時の如く、物神崇拜

や神秘の性質を持ったものでしかないからです。これらは未開の思想です。

原子も又美しい仮説です。それが正しく表しているのは、真の科学に倣った体系において内部が無いものは、何ものでもなく、集められたものも何も無く、全ては外部との関係であるということです。従って大きさは原子と一緒に見ると何ものでもありません。原子が単純に内部の物体であると仮定された観念からは、考察すべきものは何もありません。原子が存在するなら、その次にあなたは自問して下さい。そして、原子の見世物屋の処にまさに通って下さい。あなたは同時に子午線と赤道も見るのを要求するでしょう。（完）

デカルトを理解するのに何時も私たちに欠けているのは知性です。理解するにしろ、反対するにしろ、簡単なのは外観が屢々明瞭であることです。殆どのが至る所で不可解なのです。どんな人も彼自身のことを多分良く理解しませんでした。勿論、恐らく余りに孤独でした。更に、彼が話す時も孤独でした。彼の言葉は決して吹聴しません。習慣に従った言葉です。デカルトは言葉を創りませんでしたし、宗教も又作り変えませんでしたし、情熱も性質も作り変えませんでした。その全てが一体となっていて、その中で明らかにならなっていて、大変自然な彼の言葉は私たちにそれを齎します。反対に、言葉の意味を変えることから無縁な彼は、一人の人間の義務の如く、一つ一つの言葉のあらゆる意味を同時に理解します。『瞑想録』の〈神〉とは女性たちの神です。彼はロレーン(1)という場所へ行く様にして『情念論』を書いています。そして、あの有名な夜の閃きは奇跡であり、彼の思想です。デカルトはここにいますし、至る所にいます。全体であり分割出来ません。あれ程にも自己に近い処で哲学した人は誰もおりませんでした。感情は何も失うことなく思想になっています。その人物はそこですっかり自己を取戻し、読者は自らを見失います。この暗い視線はそれ以上約束しません。礼儀正しいのですけれども、勇気づけてはくれません。そこからは革命を否認している、余りに軽蔑的な保守主義者の精神を理解しなければなりません。何故なら、自分の若さを何も捨てませんでしたし、全てを変えましたが、組織の中ではなかったからです。少なくとも精神の裡には革命は無く、新しい道もありませんでした。

きっぱりと思想と延長とを区別するために粘り強く思考したので、最早如何なる困難も次に来る混乱も恐れませんでした。全てが自分の場所に送り返されました。事物の中に引っ張られる儘にならないで、全ての魂が精神の中にあります。その代わりに全ての運動が延長した事物に投げ返され、全ての情熱も肉体に投げ返されます。それは恐るべき事物ですが、便利に良く出来上がったものです。全くの処、全ては上手く行きますし、読者が余り考えることではありません。その代わりに動物機械では決して全て通用しません。常識が容易に別の事物に満足することになるのと同じ理由から、動物機械はそこで抵抗します。何故なら、動物機械は常に疑わしい些細な理由に止まりますが、作者のデカルトが同じ事物をもう一度ここでもっと力強く繰返して言うことを理解しないからです。すなわち、一つ一つの事物においては、部分部分と運動以外には何も無く、どんなものでも延長されていて、欲望とか衝動とか力になるでしょうが、如何なる神秘の魂も思想の胚芽もありません。どんな運動も単に機械的なものであり、どんな物質も単に幾何学的なものなのです。それ故に、犬が主人を見分ける運動には決して気を留めてはならないのです。その上、人間の情熱である怒りや欲望や嫌悪は、自ら身に付けた儘でいる愚か者とはいえ、もっと正確に言うとも思想と理性の働きを模倣します。というのも、その中には判断力も認識も証拠も無く、単に動作と騒音だけがあるからです。従って犬が自ら描いた三角形を前にして夢を見たと言うのは全くの過失になるのが唯一の証拠ですので、決して動物が思考する言ってはならないのです。そして何人の人々にとって、この用心も又良いものにならないのでしょうか。ところがデカルトの肖像が理解されるのを、余り期待されることもなく待つて、もう直ぐ三世紀になります。(完)

(1) ロレートは、イタリア中部のアドリア海に臨んだ町で、聖母マリア信仰の巡礼地である。

私たちの認識は事実に基づいて調整されて、そこで限定されると何処でも言われています。しかし十分に理解されておられません。経験とは、まさに例外なく私たちの全ての認識の形式です。しかし、どんな観念よりも前に経験が出発することはありません。或る観念と他の観念の間で決定することはありません。事実とは、学問によって構成されて諸観念によって決定され、そして或る意味では全ての観念によって決定された対象そのものです。事実を把握するには、まさに学問的でなければなりません。

地球が回っているのは一つの事実です。この事実を把握するには、推敲された数々の関係に従って同種類の条件を同様に含んでいる、他の多くの事実を収集してつけ加えなければなりません。先ずは、星々が東から西へ回っていることです。そして全ての天体も同様に、一つの不動の軸の周りを回っているかの如くです。それなのに幾つかの惑星は、見れば分かる様に、それら自体も回転しています。それなのに月や太陽や惑星が現れて来るのが遅いのは、地球が惑星の一つであると仮定すれば説明が付きます。それなのに赤道から極地へ行くと重力が大きくなります。それは力学的観念と物理学的観念を仮定していて、振り子による測定を仮定します。

しかし、星々が周回していることを最も簡単な事実で確認しましょう。それは未だ繰返される観察と記憶と再現と測定によって確認するしかありません。星々が非常に遠く、或る星々は比較的近いというもう一つの事実に関しては、良く調べてみるなら、それを支える仮設によっていることも十分に注意すべきことです。というのも、最も近い星々は地球の軌道に沿って移動する観察者のためにしか視差の影響を与えないからです。私たちの土台である地球は余りに小さいです。ところが或る星々よりも近い星々があることも事実です。月は太陽よりも私たちにずっと近く、しかもずっと小さいことも事実です。数々の事実の体系は、どんなものでも幾何学的です。重力の加速度が、パリでは毎秒九・八メートルであるのも既に事実です。しかし、それを確認する人にとっては理解すべきことが多くあります。先ずは観念であり、その次にそれらの観念による道具類です。斜面とアトウッド(1)の機械がそれを十分に証明しています。まさに記録する円筒のもので、同時にストップウォッチと回転する幾何学的配列のもので、比熱の測定でも、やはり認識を含みます。それは付随的な認識ではなく、仮説とか仮定された観念がなければ、経験にもならないのです。

最良のものを認識する学問において、誰もが次々にその様な事例を幾つも発見することが出来ます。器具の様に把握して測定するのに役立つあらゆる推敲された観念を、最も単純な経験の中で発見することは大変な驚きです。単純な事実は歴史にまで及んでいて、ルイ十四世が死んだ年の様に、一連の歴史や批判や天文学の認識も又含んでいるのが分かります。それを強調するのは理由があります。骰子の立方体の形状も又一个の事実であり、立方体による観念で決定されるのが明白である時、両目や両手で把握出来ないからです。このことに関しては、私が以前に言ったことを読者が思い出して貰えれば十分です。(完)

(1) ジョルジュ・アトウッド(一七四六～一八〇七)は、物理学者で落下の機械を発明した。

## 第八章 原因について

---

この問題は荷が重く、曖昧な言葉でもあります。歴史とか刑事訴訟の様に或る時は人物、又或る時は事物の原因によって理解されます。そして、もしも人物であったなら、その人物が何事かを始めた原因で責任があり、そのことを後で答えるのですが、それでここでは最初の原因が大変に重要であり、自由意志という名の下に扱われます。もしも事物であったなら、あるいは事物の状態ですらそれに従って他の事物を決定したならば、反対にこの事物とかこの事物の状態が、それ以前の状態によって今度は決定されるのが良く分かります。例えば、一筋の火薬に各粒子が燃えると次々に燃え上がって行く原因になる様に、如何なる原因も結果となり、如何なる結果も又原因になります。それが所謂第二原因になります。お分かりの様に、それらの二種類の原因が主語と目的語の様に、あるいはそう言っても良いのですが、精神と事物の様に区別します。

ところで、物神崇拜は何時も想像力に基づいて思考しながら、人物と事物の中間で動き回っています。物神崇拜は、事物の中で行動したり権力とか所有権を示したりする魂とか、精神が如何なるものかを私が知らないのを、原因によって何時も理解したがついています。そのことは思ってもみなかった事例で最も感知出来るでしょう。ここに非常に思い石があります。もしも私がこの儘放せば、落下するでしょう。石が落下することは原因になりますし、私の手を圧したり押ししたりしているのであり、それが所謂石の重さになります。その重さは石の中にあります。それでいながら違います。金の中にも同様に価値がありません。他の物神にも無く、アロエの中にも苦みはありません。石が重いのは、石と地球の二つの質量の間にある距離に依存した力が働いているからです。従って地球もまさに石と同様に私の手に圧力を加えています。この重力の力は最早、石の中ではなくて、石と地球の両者に共通したものであるのが分かります。私たちに言わせれば、それは思考された関係であり、一つの形式です。しかし、ここで石の中に何らかの努力を捏造させて、私たちの努力と戦い、少なくとも私たちの努力よりも不安定でないものを見出す想像力しか見ないのは誰でしょうか。この偶像崇拜は大変に力を持っています。想像力はそこで決して離れません。それに騙されないこと、そして苛立っている手で決して判断しないこと、それが全てです。

しかし同様にお分かりの様に、私たちが或る思想を、食事を待つ犬とか罵声を発する酩酊者とか怒っている狂人にもあるのを望むことも、同じ情熱の動きによるものです。それ故に出来る限りデカルトの力強い思想に戻らなければなりません。そして、距離と力とその他の関係から事物が再び現れるこの精神は、他のものと結び付いたり、他のものとの間で認識するので、それらの関係の一つに決して隠される筈がなく、私たち自身の肉体の中にも決して隠されるはずがないと言わなければなりません。その点を良く理解していれば、事物や囚人たちに内部の魂を仮定することも望まないでしょう。というのも、どんな魂にも多少なりとも明瞭に生き生きとした世界を把握するのですが、常に全く分割出来ないからです。私が星々に持てた認識は、私が子供の時の知覚に一部が付け加わったのではなくて、単にそれを明らかにしているのです。その認識は、こう言って良ければ、そこには何も付け加えずにその中で大きくなったのです。それ故に、どんな

自覚や思想も一つの世界であり、その中に全ての事物があり、如何なる事物の中にもあり得ないと言わなければなりません。従って、重さのある石に意志を持った心があるとは考えられず、私は飛び上がるために身を縮める動物にも意志があると考えべきではありません。何故なら、もしも動物が思考するなら、全世界にいることになり、その中で思考していることになるからです。ライプニッツは、彼のモナド（单子）によって上手く言いましたが、モナドが部分部分であるとか構成要素であるとかいう、この観念からは全く離れませんでした。デカルトは、そんな考えを少しも気にしないで、もっと先を見ていました。その様にして対象の中に原因を扱おうとすると、あるいはもっと適切に言うなら対象としての原因を扱おうとすると、対象そのものに対象を投げ返しましょう。そして、そこに延長だけを見ましょう。生きている肉体の中まで絶対的な外部の関係を理解して下さい。これが真の知識の鍵になります。そして、私たちがこれから見ると思う真の自由の鍵になります。

その次に、男性的で有名な物理学の源泉であるこの力強い観念に支えられ、私たちは少なくとも法則の原因を見分けなければなりません。今は未だ十分に行われていません。というのも例えば、雲はそれ自体によって雨の原因にならないからです。もう一度冷却されて水滴が大きくなり、再び蒸発する前に地面に達しなければならないからです。上手な言い方ではありませんが、全ての原因が一つに纏まった時に、雨になるのです。従って水が沸騰するためには、圧力と温度と小さな水泡の表面張力の条件が全て揃った時に沸騰するのです。しかし沸騰しない限りは原因があり、数々の原因が一つになっても十分でなくなるのであると私は言いたいのです。従って、その様な事例においては一つ一つ連続した関係が見落とされているのです。そして最終的な状況については、私たちが屢々影響していることもあり得ます。何故なら、溶液も又十分に原因になるのは明白であるからです。同じ様に厳密な意味で、一瞬の天体の加速度は次の一瞬の運動の原因になると言うてはなりません。というのも、それらの原因はここでは絶えず他の数々の天体の位置にも影響して、引き付けられる運動は全てに機能があるからです。この事例からもお分かりの様に、原因から結果への関係は宇宙の一つの状況から次の状況とか、閉じられた関係がある限り、閉じられた一つの体系の状況から次の状況しか理解されることはあり得ません。諸原因の一つの現実的な鎖は、それ故に統制された生成の原則によってしか思想になり得ません。数字の順序におけるのと同様に、一つの方向を持つものを理解して下さい。それらは次のものを形づくるか生み出す最初のものですが、逆にはなりません。ところがその様な法則は、物理学者たちに遅れて現れるだけであり、その法則に従って閉じられた体系と反発力と爆発力と、多少なりとも活動的な化学的物体のものになります。温度の上昇と共に力学的均衡状態の方へ自らが変わります。その様にして建設された壁、火薬の詰まった大砲、引き絞られた弓、石炭の貯蔵、石油貯蔵タンク、火薬庫、生きた肉体、それらが厳密な意味で原因になります。しかし、この原因という言葉は何時も些か便利な使われ方をしていて、明瞭に説明されると事実という無意識的な条件にまでも及んでいます。その意味では、例えば天体の運動の原因は引力の法則であると言うのと同じです。そこからは神秘の原因に戻されないで、不都合はありません。（完）

目的因は王への聖なる処女たちであり不妊婦である、というベーコンの言葉は良く知られています。しかし言葉を信用するや否や、如何にして抽象的で空虚な観念が対象との接触で意義と生命を取戻し、ついに何ものかを把握する助けになるのか、それはあらゆる観念の試金石であることを示すための良い例がそこにあります。確かに、風は菩提樹の種子を遠くに発見された土地へ運んで行ける様に、創造主が羽根を付けたと譬え言われても、何の説明にもなりません。鳥たちが飛べる様に翼を与えたのである、と言っても同じことです。しかし、これらの話を発展させ様と努めると、滑稽さは全く失せるでしょう。何故なら、それでも大樹の陰よりも何処か良い場所に種子を蒔くのに羽根が十分に役立つのは本当であるからです。更に翼の構造を理解したいと思うと、飛行のために作られていることを必然的に推定することを誰も否定出来ません。というのも、その時はこの自然の機械に弓形に反った羽根とか中空の骨とか筋肉の有用性を発見するからです。従って疑問とは、「何の目的のために」から、如何にしてにへ自然と移ります。つまり諸原因と条件を探求することに移ります。鳥の羽根は一方向に並んで弁を作っているから、飛ぶために作られていて、他に理由は無い、等々です。更に、クロード・ベルナル（1）が肝臓は何らかのものの役に立つに違いないと仮定したのは間違っていないかもしれませんが、それは彼が何かを、取分け如何にしてを探求していることが条件です。そこから分かることは、幾何学とそれらの形式に倣って再建された知覚を決して疎かにしなければ、神学的観念も少なくとも指導的観念として十分に正しいものになり得ます。神は飛ぶために翼を作ったのであると言って或る人が満足しているならば、彼に言葉以外に精神の中には何も無いのです。しかし、飛ぶためには翼が如何にして役立っているのかを認識するならば、彼は所謂諸原因によって事物を知ることになります。そして、神という創作者がそこに付け加わる観念も、事物のものである観念を変えるものは何も無いのです。ダーウィン自身は、暗い洞窟の中の蟹が盲目になる様に、他の蟹に対して有利さを与えることが出来る性質をその中で探求する時でなければならぬ最終目的を持ち続けます。何故なら不必要な目を持つことが、如何に有害であるのかを点検することは重要であるからです。そして、この様な対象に目的を原因に結び付けるのは、まさに有用性の観念です。というのも、仮定された有用性が目的であるからです。しかし説明された有用性は、お望みのとおり原因であり、法則であり、説明された対象そのものです。

良く認識しない何らかの力学を研究する時は、このことが良く感じられます。何の役に立つのでしょうか、と各事物のことが自問されます。このことを発見するために、ゆっくりと出来るだけ単独にして原因が何であるのか、あるいはもっと適切に言うなら、体系の中で何に結び付いているのかを探求するために、このものを働かせます。その様にして目的という指導的観念から、原因とか条件を構成する観念へ容易に移行されます。そして、追い求める目的の観念が、もしも述べることを簡単に諦めないならば、常に増え続けて、理論的な神学と同じ様にまさに道具や力学を全て齎すと考えなければなりません。

最終原因が自然現象の再構築において指導的なものとして既に成功している時は、もう少し曖昧なものになります。例えば、屈折した光は最短の道を通らなければならないとか、一般的に自然は最も簡単な方法で目的を達成しなければならないとか言われます。勿論、これらの虚構は劣

働を無視して根拠も無く話す人々にとっての作り話に過ぎません。探求そのものの労働においては、自然の目的を考えようが考えまいが、最も単純な仮説を試みるのは常に当然であり、それが十分であるならば常にそれに越したことはありません。そして、ここで私たちは推測の中で労働者の良識に従うのであり、何の疑いも無くプトレマイオス(2)を模倣した何か複雑なものよりも、コペルニクスの体系とか、二つの星よりも一つの金星を好む様になるのです。

思考するための職業の根柢には、誘惑と外見の闘争があります。どんな哲学も最後にはそこで定義されます。夢の様にのしかかる驚嘆すべき宇宙から自由になって、ついにその幻想に打ち勝つことが重要です。確かに偽りの神々を何時も追い払うためには、正確に列挙することによって、この広大な自然をせいぜい単純なものに帰することにあります。厳格なデカルトの術が誤解されるのは、最も狂った情熱家や予言者や見神者たちが、無為な者たちを増やして力の冷静な列挙によって既に打ち破られていることを十分に分かっていないからです。逃亡も真面目な労働です。(完)

(1) クロード・ベルナール(一八一三~七八)は、生物学者で近代実験医学の祖であり、『実験医学序説』(一八六五)は思想界にも影響を与えた。

(2) プトレマイオス(一〇〇頃~一七〇頃)は、古代ギリシアの天文学・物理学者で天動説による「天文学大全」と投影図法による「地理学」で知られている。

自然の法則は二つの意味に理解されています。その意味で、先ずこの世界には或る単純さと、同一事物への帰還があります。例えば少なくとも六十の単体があって、千でも二つでもありません。固体も同じです。つまり大抵の場合は、同じ形を同じ場所であるのが物体です。もしも流体しかなかったなら、力学を定めているのは何でしょうか。そして常に新しい物体しかなかったらば、化学者も迷って仕舞うことでしょう。そのことは物体が常に持続して行くと言われない良い機会でもあります。ここでは弁証法によってまさしく神まで登ることが出来ます。そして容易で誰でも手が届く理性の働きによって言えるのは、万物の優れた主人が対象も無く、同様に試練も無い人間の知性を望まなかったことです。私が超越的と呼ぶこの種の哲学は、鳥が囀るのと同様に、人間にとって自然でもあります。しかし発展するための本当の力は、百回取り壊されて百回復元される試練の中には決して無く、寧ろ最初は外部の条件と生命そのものが自然に一致した観念の中で、ついには私たちがそれと大変緊密に合致した思想にあります。しかしその観念をもっと追い詰めると、その確認が私たちそのものであるのが分かります。要するに、それが思想の初めであり、継続した発条になるのです。それが希望であり、信念です。もっと正確に言う、可能な限り思考するための意志です。何故なら、もしも些細なことや子供の頃の外見に気を留めていたなら、際限の無い多様性と奇跡ばかりになるからです。妄想は、途方も無く狂っている様に見えても思想の自然な流れでしかないと言え言えるのですが、統制が無く、聴衆や幻影や前兆や鬼火を要求する全てのものを断固として無視することもあります。私たちが同意したなら、宇宙は流動体になるでしょう。しかし、判断力はこれらの事物の王です。判断力が保持され得る限りは神の子です。私がこの世を支えているのであり、この世は私と共に落下すると考えるのが私は好きです。選択によって、しっかりと支えましょう。その様なものが哲学の精神です。

凡そ、その様なものが理性の王国になります。理解力の法律学とは余りに異なります。精神はそこで少しも自由を感じませんが、権力には好都合です。何故なら自然に成り得るとするなら非常に流動であるからです。永遠に渦巻が四季に変わる時、どうにかこうにか距離、方向、力、速度、質量、張力、圧力、数字、代数学、幾何学によって常に支配されることで、思考されなければならぬでしょう。物理学は少なくとももっと困難なものになるでしょうが、思考されたものに変わりありません。これらの自然の法則とか形式は、私たちの道具であり器具です。そして、天体の運行が果てしなく複雑になる時、その様にして更に極端な正確さに進む時、私たちは直線と円と楕円では少しも把握しないに違いなく、力と質量と加速によるに違いありません。というのも、これらの要素は運動自体の要素でもあるからです。運動とは形式のものであり、目覚めの最初のイメージで生まれる如何なるものでもありません。正確に言うと、法則の無い運動は最早如何なる運動でもないでしょう。運動を知覚することとは、今まで十分に述べた様に、同一の儘の動体と連続的に変化する距離の観念と共に諸変化を調整することです。単純な知覚においてさえも、運動とは結局のところ表象され限定され分割され得ないものです。運動そのものが変化の法則です。そして、この法則がより一層完全になって、その継続した道程をより一層明らかにします。つまり運動がより一層運動になるにつれて、実際の運動になります。何故なら、それ

らの関係は他のものと共に全てがより一層限定されるからです。この方法によって理解力はプトレマイオス(1)の体系から現代の体系へ移行したのです。数々の外見はだんだんと良く結び付き、少なくとも私たちの情熱から離れて、そこで何も変えることなく、占星術師たちの自然の中に秩序を設けました。

自然が幾何学者の服に大変良く似合っていることに驚嘆する者たちは、二つのことを認めません。一つ目は、彼らが数学的手段によるあらゆる方策とその柔軟さを認めずに、その手段がだんだんと複雑になることです。何時もそれらの輪郭をより良く描き、何時もそれらの関係をより良く把握し、それらの力をより良く向きを決めて判断し、そのことのために直線を歪めることがないのです。これは慣性とか不変の運動、そして他の堅固な仮説の様に、問題には原則を何時も持ち出す人々には良く把握されていなかったことです。曲線運動を記載するために三つの軸を曲げたいと思ったり、あるいは隕石のために赤道を曲げたいと思うなら、同様に愚かなことです。しかしプラトンが良く言っていた様に、曲線を判断して分かるのが直線です。無限のものを判断して分かるのも有限で完結したものです。そして昔からの数字全体が微分計算を齎します。これらの考察によって、どんな認識も経験になりますけれども、どんな法則も何らかの意味では先験的で経験に基づかないと良く理解したいのです。しかしここでも又、観念と事物を強く結び付けることを忘れないで下さい。二つ目の、無視して認めていないことは、数学的形式の枠外にある自然は実際には何ものかであって、存在しているとか存在していないと言うことが出来ると信じる処にあります。この誤りは、既に半分作られていて適当な距離に私たちを押しつける学問を自然と呼ぶ処から来ています。何故なら、星々の東から西への運動の知覚は、大変に理性的な一つの仮説であり、太陽と月の遅延や色々な天体の急な変化と一致しないからです。そして、お分かりになった様に、運動についての幻影さえも堅い判断力や自然が示さなかった仮定から起こります。私たちの数々の誤りは如何なる思想にもなります。でも、自然は私たちを騙しません。自然は何も言いませんし、何ものでもありません。しかし私たちは、少しも注意深い知覚ではない夢想によっても、より良く判断出来ます。それは未だ脈絡の無い自然を如何に表現するのかを少しは分かせてくれます。全ての外観は事物であり、私たちの全ての運動であり、あらゆる処の変化になるでしょう。私たちが人間である限り、それらは思い出であり、計画であり、恐怖でもあります。激しい怒りと涙の大洋です。法則などはありません。それ故に、私たちの仮定した法則がまさに事物の法則であると確信するかどうかを尋ねてはなりません。何故なら、原始時代の自然はその中に秩序があり、運動の背後にも他の運動があり、事物の背後にも他の事物があるのを望むことになるからです。そうではありません。それは寧ろ、創造前の混沌なのです。そして誰も目覚める時には勿論ですが、精神は一瞬ですが水面の上を漂うのです。そこから分かるのは、理解力が経験を支配すること、理性が経験に先行すること、そして少なくともそれらの条件に基づいて経験が理解力と理性の両方を共に明らかにしていることです。(完)

(1) プトレマイオス(一〇〇頃～一七〇頃)は、古代ギリシアの天文学・物理学者で天動説の「天文学大全」と投影図法による「地理学」で知られている。

諸原理の体系は常に議論になりがちです。というのも、同一の事柄を別の言葉で言えるからです。ここでは辛うじてそのことを前もって言うことにして、きちんとした推論に基づいた認識に入りたいと思います。そして諸原理は、原則とか格言の形式による簡潔な言葉でしかありません。例えば本当のことが確認された予言とか、曲芸師の奇跡とか、あるいはラジウムが発見された時の様に全てをひっくり返す様な何らかの物理的発見を前にして外観が混乱している時に、精神に原理そのものを思い出させるに適したものでもあります。更に、理解力の原理と理性の教えを区別しなければなりません。その両方を体系的に発表しているのはカントで、他には誰も行っていませんでしたが、私はここでそれを説明するつもりも要約するつもりもありません。しかし最も重要なことは述べてみましょう。数学はそれ自体で理解力という原理の体系を形成します。つまり、それらの形式の明細目録に基づいて経験の中で何でも構わずに把握しなければなりません。そうでなければ全てを把握しても何にもなりません。それは次の種類の様な一般的原理によって示されます。時間と空間の関係によって他の全てのものと結び付いていない経験においては、決して対象も事実もありません。閉じられた体系には決して変化がありませんが、その体系は何らかの不変の量を残した儘にしないで、直ぐに流出を許します。この後者の原則については、変化の定義そのものでしかないことに注意して下さい。余りに変化無しで済ませる言葉は、変化するものを保管しないで、何らかの変化を私たちが思考することが出来ると信じさせます。それはまさに外観に起こるものです。実を言うと、そこには何も保管されていませんし、決して何も取戻しません。しかし、まさしくこの点について、あらゆる注意を払わなければなりません。その様な外観そのものを誰からも認識されないのです。私が、手品師の小球が消えたと言う時、私は二つの事柄を同時に説明しているのです。外観としてはその小球が最早無いことですが、実際には何処かにあることを認識することです。後者の確信が無ければ、前者の指摘は最早意味がありません。永遠に消える外観も必ずありますが、私はそれを誤りとか錯覚とか思い出と呼んで殆ど気にしません。従って手品師への大きな関心事は、小球がそれらの幻影の一つではない考えを私に与えて持ち続けていることです。そこから出発して、理解力の原理に含まれるこの種の証拠を良く把握して下さい。もしもそれが一方では外観に応じて、そして理解力によるどんな働きの前でも全てが現実になる自然と、他方では対象の無い理解力とその原理を探求する自然を私たちに与えられたならば、両方の一致は神学上の弁証法に頼むことしか出来なくなるでしょう。例えばそれは諸事物による〈被造物〉である人間が私たちに騙したいと望めなかったことを証明することです。もしもその下に何も無いとすると、大変に貧弱な証明です。しかし、その下に何があるのでしょうか。宇宙の現実理解力の働きによって、対象が外観の継続した変化に基づいて存続するこの条件そのものによって自らを限定し定義します。立方体は沢山の局面から現れますが、それはまさに不変のものと思われれます。そして、それらの外観は従って方向と距離と運動に倣った外観でしかありません。外観は自らが定めた立方体を最早根絶することが出来ません。対象とは存続するものです。対象としての変化は、その変化に基づいて対象が存続するものです。私たちはここで混沌と秩序を選択する必要がありませんが、実在と虚無とを選択すべきです。秩序は私たちの裡で思い出と感情と計画のものでありますから、前にも言った様に

、虚無は事物の秩序によってしか支えられません。「自己と全ての事物は存在するかしないか、選択しなければならない」と私の先生であったジュール・ラニョーは話しましたが、彼が私の記憶の中に残っていた幾つかの決まり文句を偶然から理解する前に、私は自分自身のために辛うじて小さな道を描かねばならなかったのです、私が彼の弟子であるとは敢えて言いません。

その証明を明らかにするために私は、有名な因果性の原理に関して『純粹理性批判』の中で十分に推敲されたもう一つのことをつけ加えたいと思います。次の様な証明です。もしも自然が常に連続した現実を私たちに与えたとするなら、その連続は常に何らかの法則で、前のものが次に続くものを決定して別のものではないことを自問することが出来るでしょう。しかし事実として私の知覚においては全てが連続したものです。例えば私が散歩をしている時、一本の道の家々は私にとって次々に続いています。結局のところ私はその中で真の連続と、同時の事物ですが次々に既知になるものと区別しますので、それ故にまさしく因果性に関係している真の連続の真理がなければなりません。そして私が、炎と煙と廃墟が連続した或る現実の町を走り回る時に、この連続した外観を見分けるのもそこからです。要するに外観の連続がある限り、連続の真理は常にあります。別な言い方をすると、連続に法則が無ければ、決して真の連続はありません。その様にして対象としての連続は因果性そのものです。以上は、理解力の原理を含むその種の証明です。

理性の原理については、それらの原理はもっと抽象的な段階にあるもので、自然は少しもそれらを支えません。そして精神は健康のために調整される様に、好みによってそれらの原理に従っていると云わなければなりません。例えば、既知の処までの秩序に反して一回しか発生しない事件は、事物の急変というよりも寧ろ、想像力と情熱の働きの所為であることに違いありません。あるいは又、仮説を儉約して簡明にする様に努力しなければなりません。つまり最も簡潔な推論は、既知に倣って未知のものを判断しなければならぬのと同じ様に試行すべき最初です。要するに情熱を、つまり感動的な意見を用心しなければならず、それは寧ろ一つも見失うことのない様に大いに気を配って外部の驚異の後を走ることを判断しなければなりません。これらの規則は、経験よりも寧ろ意志のものです。それらの規則があるためには、決して手に取ってはならないから実行されるのは余りに不十分です。正確に言えば、それらは判断力であり道徳的秩序のものです。情熱の畏と言語の容易さを十分に知らずにいる限りは、その価値を感じることも出来ません。要するに精神は耐えなければならず、屈してはなりません。興奮した人々には余り質問しないことです。計算高いやり手の人々にも全く質問しないことです。それは精神という主権者の沽券にかかわるものです。（完）

メカニズムは全ての変化が運動であるという世界観です。例えば気体の圧力は、それらの分子の活発な運動によって説明されます。光は波動です。固体とは引き付けられた原子の組織体です。この宇宙的メカニズムという仮説の中に原子と力と慣性も含んでいなければならないのは、それらの全てがお互いに関連しているからです。理解力がここでは全ての私たちの表象に本来の法則を課していることは確かです。その様に理解しなければなりません。さもないと全てを理解していないことになります。

しかし、如何なる証明もそれ自体では自立せず、常に何らかの攻撃があり、それらの証明が鉄条網の様に単に防御から離れないなら、衰えて仕舞うのが哲学の大きな秘密です。精神は諸証明の背後にいると強くなりませんが、少なくともその中で常に諸証明を前進させるものです。そして、この宇宙的メカニズムの事例は、まさにそのことを理解して貰うのに適切です。というのも、私たちの表象が少なくとも物質的有用性のためであって暴くものが何も無く、両目と両手で上手く知覚されないかも知れず、恐らく他の道で見抜いたり予知したりしなければならぬことを仮定したがる懐疑家や神秘家の攻撃にあなたは何と答えられるのか、ここに哲学がまさしく倫理学であって空虚な好奇心のものでないことを理解させてくれる理由があるからです。

ルクレティウス(1)は、デモクリトスやエピクロスが最も有名である原子論と言われている多くの人々の探究を果敢に押し進めましたが、情熱や奇跡や予言者や神々に対して断固として意志を緊張させていたこれらの奥深い体系の精神を、生き生きとした光の中に照らして明らかにしました。しかし、囚人は脱走して死にました。驚くべきことですが、酩酊者であったとか、憤慨していたとか、あるいは恐らく何時も根強い熱情を隠すしかない理由のためとか、弟子の裡では共通してある想像力と理解力の取替えによって説明がつくものです。ルクレティウスは事物の建築家と偶像の破壊者をすっかり忘れて、深淵を越えて先ずは単純な運動を目指す精神がついにそれらを試みて複雑にしますが、まるで正確な明細目録を作るために最後には全ての富を把握して戻す網の様です。彼はその中で、メカニズムが自由への方法と道具であると同時にまさしく自由の証明であることを忘れていました。何故なら、自然はこの驚異的な体系を支えています、決して与えてくれないからです。

運動による変化の表象は、まさしく偏見です。そうです。回転する玉突きの球という最も単純な場合でさえも、数々の外観に運動という仮説を強制するものは何もありません。そして、鋭敏なゼノンが気付いた様に、その球は同一の場所には同一の時にしかないので、運動を見せているのは常に球ではありません。映写機では走る馬は決して同一ではなく、スクリーンに映るイマージュは全てが異なっているのは本当である様に、球は消えると直ぐにその横でもう一つの球が生まれると仮定するのを妨げるものは何もありません。運動とは、単に好きな様に見て選択されているのです。勿論、容易なことではありません。というのも、夢を見るのは最も容易なことで、救世主であり悪魔を祓う人ですが、あらゆる魔術に反対する精神の武器の様なものでもあるからです。メカニズムを吟味する自然によって、精神は不変です。そうです。しかし精神はメカニズムを設けて、維持し、作り出し、余りに複雑にした状況で吟味します。怠惰な物理学者はその証明を見失います。彼は神も精神も忘れて、子供の恐怖と偽りの神々と何処にでもある精神

に再び陥ります。寧ろ、物質の中に精神を隠して、あらゆる手段で自分の目的に進む頑なな意志で必然性を歪めます。その本当の名は宿命と言います。ここに私たちの敵を捕らえます。真の物理学者は反対に、自然の力を持ったあらゆる自由の外観を取り除きます。そしてメカニズムに面と向かい、それと同時に自分の精神を解放します。

確かに、それは情熱が飛び込んで来るので困難であり、辛いものでさえもあります。一つ一つに形がある数々の木の葉に精神を拒否するのは情熱の戦いです。それらの木の葉の相違が種子の中にある訳ではなく、それらの形と配置の要素が空気と光の中で、炭素で出来た鍾乳石に与える様なものです。こちらではキツタの形となり、あちらではプラタナスの形を与えますが、濃縮された溶液の中で樹木に似ている結晶を与えることを、まさしく知識になる前に望むのは困難です。その反対に、横になって眠ること、そして種子の中に隠されて目に見えない建築を想像することは簡単です。それは自らの好きな計画を少しずつ実現させることです。これらは霊媒や霊術者の奇跡に溺れて、何も分からないと言ったりテーブルに計り知れない力や隠れた精神を捏造する夢想家たちと変わりありません。しかし、それらの精神の中で打ち勝った精神でなければなりません。ルクレティウスはそこに自らの精神を見失いましたが、デカルトは見失いませんでした。そこを注意することです。（完）

（1）ルクレティウス（前九八頃～前五五）は、古代ローマの哲学者・詩人で、エピクロスの思想を継ぎ哲学詩『物の本性について』を書いた。

第三部 論証的認識について

認識が少なくとも言葉によって如何にして広がり確認出来るのかを調べる前に、言語のことを論じなければなりません。抽象的な独創や空想や情熱や制度を述べて時を過ごすのには、言語は王です。短縮された説明において重要なのは、音楽の深みから代数の頂点まで及ぶ美しい領域を、その延長の中で広げることです。しかし先ずは言語の働きが如何にしてそれらの罫の中で、精神を手に入れているのかに驚嘆して下さい。言語を創り出すためには自らを理解しなければならず、それ故に話すことを学ぶ前に、話すことを認識しなければならないと作家たちは言っています。この子供っぽい話は、話すことなく先ず思考することを学んでいなかった人々によって哲学と見做されている、弁証法的な詭弁の典型です。

叩くとか、与えるとか、取るとか、逃げるための動きと私が理解する人間の行動は、私たちにはこの世で最も興味あるものですし、子供に関係するこの世で唯一の事柄です。何故なら、子供の時代にはどんな幸も不幸もそこからやって来るからです。これらの行為は最初のしるしです。そして、これらのしるしを理解することは、先ずこれらの行為の効果を経験すること以外にはありません。人間はしるしによって接近する事物を見抜くことを学びますので、或る人が行おうとしていることを僅かな動きから大変に早く見抜くことを覚えても驚く必要はありません。人間のしるしという際限の無い領域を述べることだけが重要です。その目的のためには行為の素描とか初めの部分を先ず見分けます。それは次の様なことを十分に準備します。その様なこととは拳を突きつけたり、手を差し出したり、腕を組んだし、肩をそびやかしたりする様に、殆ど全ての動作の始まりでもあります。そこから自然に態度を見せる行為の準備に移ります。跪いたり俯せている人は戦わないでしょうし、背中を向ける人は恐れていないでしょうし、体を縮める人は飛び上がるでしょうし、以下同様のことが予感されます。結局のところ、これらの行為の準備に係る付随的な結果も又、注意しなければなりません。それらは人間の身体という工場から生じて、誰もが最も簡単な生理学に従って認識する様なものです。つまり顔を赤くしたり青くしたり、涙を流したり、震えたり、鼻や頬を動かしたり、ついには叫び声を上げたりします。叫びは筋肉の収縮というものにとっては自然の結果です。そして、この極端なしるしには非常に注意しなければなりません。それは他のしるしに取って代わり、回り道をして代数まで生む様に運命づけられているとここで述べなくてはなりません。しかし予め指摘されなければならないことは、抑制された行為そのものでしかない思考は、大変に明瞭なしるしも又与えています。それらのしるしは行為の停止であり、両目の働きや計画された運動で示される注意であり、ついにはそれらの運動による両手の運動であり、予め私たちは見た事物を触ったり量ったりします。あるいは単に視覚と聴覚を優遇します。これらのことは全てが良く知られています。これらのことを思い出し、私たちが動物たちのしるし、取分け人間のしるしと同様に家畜のしるしを解釈する術を知るの言うことで十分です。馬に乗っている人は、馬の歩き振りや耳の動きで行おうとしていることを見抜きます。ここから考察しなければならないのは、言語が社会の子であることです。その上、最初に人間は孤独ですが、次ぎに大人と同盟するという事は滑稽な作り話に過ぎません。数々の優れた言葉に続いて私はここでアガシ(1)の力強い言葉をどうしても引用したいと思います。「ヒースは常に荒野にあった如く、人間は常に社会にあった」。人間は生まれる前から社会の中で生

きています。従って言語は人間と同時に生まれました。そして、私たちが社会の中に人間の力を感じるのは常に言語によってです。人々が逃げ出す時には人も逃げますが、正確に言うならそれは強制されずに、そこで話したり理解したりすることです。それ故に教育でしかないのですが、模倣が如何にしてそこから社会そのものの表現になるしるしを、自然に単純化して統一するのかを理解しましょう。色々な儀式も常に儀式に関するしるしから成っていますし、身振りや舞踊はそこから生まれ、常に礼拝に結び付いています。そこからは又、行為や叫びによって慣例的な言語も生まれます。

未だ理解すべきことは、何故人間の声が支配したのかが残っています。というのも、声は言語の変化の秘密そのものであるからです。人間は自分の行為を話しました。何故でしょうか。それに関してダーウィンは一つの理由を言っています。叫びは夜であることも分からせてくれるとのことです。更に他にも色々な理由があります。叫びは注意を惹き起こしますが、身振りはもう注意を仮定しません。叫びは結局行為を伴いますが、身振りは中断します。行為と驚嘆だけの生活を考えてみましょう。私たちは、最初に身振りを伴いますが、次にはそれに代わるもののために、自然に明瞭なものになって抑揚を付けた叫びが生まれるのが分かります。その様にして慣例的となった声の言語が生まれます。しかし文字の様に、固定された身振りでしかないものは有用であり、人間は言葉を書くことを覚えます。つまり書かれた身振りと言声と発音による最も単純なデッサンによって表すことを覚えます。この文字は先ず音楽の様に歌わざるを得ませんでした。次には目で読むことを覚え、ご存知の様に言声や音が常に単純化されたり不鮮明であったりして、最早正確に対応しない時でさえも、書体や綴字法としての表象に結び付きます。その様にして文字によって言葉は目で数え上げる術を知り、手が一つに纏めたり置き換えたりする術を知る固定された対象になります。しかしながら、これらの性質は情熱の運動から逃れますが、それらのしるしの中から身振りや叫びが取って代わる不思議な力を見出すために、何時も大変に自然な努力が払われて来ました。しかし今は、この言語の不思議について触れない様にしましょう。これから述べることで重要なのは、明確な言語とか、少なくともそうでありたいと思うもので、単に言葉と共に思考することから成る遊戯に関することです。この認識が正当である限り、この認識は論証的と言えます。しかし、その氾濫は弁証法的であるかも知れません。（完）

(1) アガシ（一八〇七～七三）は、スイスの自然科学者である。

誰でも知っていますが、暇な時の出会いにおける観念の交換はこの様に言えるとすれば、既知の決まり文句で行われます。精神は変奏曲の様にせいぜい言葉を楽しむだけで、思いがけないこと以外に喜びはありません。私はそこに昔の儀式の名残を見ますが、人々は色々なしるしを確認して十分に幸せでした。その様なものが社会の本当の楽しみです。精神が反抗しても、不毛の争いしか齎さないでしょう。活発な口論は敵を彼の領地へ追う必要性から、不意に襲ったり茫然自失させたりします。従って議論に勝つことが何らかの真理を何時か確立すると信じるのは、子供に違いありません。想像力は、明確に定まらない形には既に十分に力があります。一瞬びっくりする幾何学の詭弁にもそれは存在します。図形も無く単に言葉で議論する時、首尾良くより一層強くなった理性は、表現しない以上に不条理なことはありません。異議を唱えられない以上に理性的なものもありません。というのも、言葉は決して真実に結び付いたものではないからです。その反対に、言葉の起源が十分に理解させてくれる様に、常に言葉の意味を越えた向こうへ行くのが感動させる力であり、それが何であるのかを知らない動物にとっても証拠を示しているからです。

言葉はお喋りの人々や、逆上し易い人々や、ほら吹きの人々のための劇場に何時もお任せする訳には行きません。しかし議論は素っ気なくて、はっきりした質問によって辛うじて言葉のこの魔法を乱しにやってくるが、更にそれらの質問は相手にとっても自分自身にとっても罨だけです。この他に外見上は同意したり、自分以外を非難尽くしにして安心したりすることで、議論に疲労して全てが終わることもあります。ここではカトリックの奥深い叡智に感嘆出来ますが、それは重大な問題がその様な即興的なものを自由にさせるのを望むことではありませんでした。しかしギリシアの賢人たちやプラトン自身は、既に人を納得させる術や説得する術のための探究をしておりました。不朽の数々の対話にその対象を見ることが出来ますが、結局のところそれは恐らく混乱の中に精神を投げ入れる一語一語の議論と、取分け読み返すのに役立つもので大変に力強い光を生む美しい祈りの間で多分探究されるのを対照とするものです。しかし、プラトンを読むには議論を遙かに越えていなければなりません。いずれにしても多くの人々は凡人ではなくて、更に次の様に言って厳密な多くの議論を望んでいます。「二つのことは一つである」とか「私がここで言いたいのはあなた自身の矛盾である」。学派のボカルドやパラリプトンの説以上のものは何もありません。しかし、虚偽と相容れないものが必然的に真理であり、そのことは反駁しながら証明することであるとの魅力的な観念に倣うなら賢人の子供時代の議論は何て無駄なことでしょう。勿論、宇宙はそんなことを無視します。

しかしながら私たちは角、同形の三角形とか相似形の三角形、円、楕円、放物線を決して無視しません。これらのものは弁証法や先ずは言葉によって限定されながら、そして別な風には存在し得ないで、人が語るものによって推敲されます。次には、その思索者は確固たる結論が出るまであらゆる可能な反論を自分自身で行って推敲します。これらの数学的な弁証法の力は何時も思想家たちを少し茫然とさせて困らせますが、自然の秘密よりも沢山の代数学によるもっと抽象的な言葉が恐らくそれ以上に近づく時であり、少なくとも天文学や力学や物理学に近づく時です。この書物はそれらの困難をすっかり明らかにすることを目的と見做しますが、それは純粹論理学

が可能にするもの、修辞学と呼ばなければならないもの、数学がより多くのことを可能にする理由、それらが何であるのかを説明する術を知るためのものでもあります。「鳩は、真空ではもっと良く飛べると思うかも知れない」とカントは言います。数学者もこれと全く同じ様で、自分の両目と両手に照らして対象にもっと止まって最早十分に思考しません。最早、単に言葉だけで更にもっと先を思考することが出来ると信じているかも知れません。そこから交替で余りに評価されたり無視されたりして、これらの弁証法的な遊戯が生まれたのですが、それが神学とか心理学とか魔法とか言われるものです。幾つもの真理を含んでいますが、情熱の服を着ていて、説得力のあるそれらの効力は全てが屢々余りに良く出来た三段論法とか抗弁の余地の無い反論に帰せる様にするためです。多分、議論を最もしない哲学者の一人がアリストテレスです。恐らく自分の青春時代に大変に力を入れて学説的に議論する術を身につける思想を持っていたのが、プラトンの弟子であるアリストテレスです。そして、アリストテレスの驚異的な体系は全ての可能な議論も形式化されていて、幾ら鋭敏で緻密な諸世紀でも大したものを追加しませんでした。もしもアリストテレスを偏見無く読んだならば、最早論理学や言葉の学問と同時に理性の学問も見ないでしょうし、寧ろ全て言語だけが理解力を負っているものを扱う真の修辞学を見るでしょう。それを何と呼ぼうが、お望みの通りです。従って論理学に関して如何なる扱いをしても構わずに読者を連れ戻すなら、詳細と体系のために何らかの事例を今から調べなければならないのは、一般文法学の様なものです。それらの奥義を知るや否や、全てが正しくなります。(完)

言語の命題が対象に適しているか否かを調べるのに応用される修辞学があります。この修辞学はどんな学問にも伴っています。例えば、正しい人は全て幸福である、という命題を調べるためには、言葉と対象を検討することが重要です。一般に論理学と呼んでいる純粋な修辞学は、少なくとも命題の相等性に関わっています。あるいはお望みであるなら言葉の多様性の元に、意味の一致に関わっています。更に言えることは、その純粋な修辞学が一つ又は複数の命題から、対象を考えることなく単に言葉によって新しい言い方を如何にして引き出せるのかを検討することです。従って、正しい人は全て幸福である、の命題から引き出せるのは、幾人かの幸福な人は正しい人である、になります。幸福な人は全て正しい人である、にはなりません。しかし、如何なる不正な人も幸福ではない、という否定から引き出せるのは、如何なる幸福な人も不正の人ではない、という命題です。

ここで対象を考えようとしたり、幸福とか正義についての何らかの議論を始め様と試みたりしないためには、アリストテレスが既に行った様に、数々の項目を文字で表すのが好都合です。その様にして、幾つかのAはBである、から引き出すのは、幾つかのBはAである、です。それでも、幾つかのAはBではない、から引き出すのは全て何でもないでしょう。ここでお分かりになるのは、今日の記号論理学者たちが試みた様に、一種の代数学によってこれらの結論を述べることもあり得るということです。これらの単純な事例によってここで思い出される諸原則は、際限の無い研究を判断する役に立ち得るでしょうが、それらの研究に従事する苦勞によって何時も、余りに評価のされ過ぎです。

同じ言葉による反対の命題は、数々の単純な観察を行う機会を与えますが、言葉の全てや、幾らかや、一つ一つの意味を把握させてくれるのに非常に有益です。いわば一般文法の様なものです。もしも、全てのAはBである、が正しい命題であると定められたなら、反対の命題である、如何なるAもBではない、は誤りになります。しかし前者の命題が誤りであったなら、後者の命題は正しいかも知れませんが、誤りかも知れません。全てのAはBである、ことと、幾らかのAはBではない、ことは同一ではありません。というのも一つは正しいか誤りになることから、もう一つは誤りか正しいことを引き出さなければならないからです。

会話でも又、これらの言い方が使われます。全く形式上の理性の働きによって、もう一つの命題を生じさせるよりも、命題そのものを点検する方が有益になるでしょう。経験から引出された命題は寧ろ、もしもAであるならBでもある、ということになるなら更に前者に等しい仮説と呼ばれる形式を表しています。それはまるで、もしも或る人が正しいとするなら彼は幸福である、と言われた様なものです。もう一つのこの言い方は、少し異なった分析が導き出されるでしょうし、次の様に推論されるでしょう。もしもAであるならBです。あるいは、Aであることはそれ故Bです。あるいは、もしもAであるならBですから、Bでないことはそれ故Aではありません。それなのにお分かりの様に、Aでない、又はBであることの命題が何も導いていないのです。もしもAでないならBでもない、を前者の命題に追加しなければならなかったに違いありません。数々の対象は何も与えません。言われていることを単に考えるだけです。言われていることはその様な言い方を含んでいるか否かを考えるだけです。

この草稿をもう少し書いて終わりにするためには、最後の形式から昔からの三段論法へ移れます。もしもAであるならBです、と言わないでその代わりに、Aであるものは何でもBです、と言いましょ。もしもXはBである、という命題を追加したなら、XはAである、という結論も導かれるでしょう。AはBを排除する、ということから、もしもAであるならBではない、というもう一つの形式も同じ様なものです。XはAである、ということから、XはBではない、と結論付けるのも同じ様なものです。Xが全てであるとか、幾らかであるとか、一つであるのは、それがXと同じXであるからです。そこには三段論法の第一の形があります。羨望する人は誰もが惨めです。野心家は誰もが羨望する人です。野心家は誰もが惨めです。これと同じ仮定から出発して、もしもAである者は全てがBであるとして、XはBでないと定めます。又は、もしもAがBを排除したならXはAでないことが結論付けられるでしょう。それは三段論法の第二の形になります。例えば私が三段論法と呼ぶ、第三の形と三段論法とを良く区別するのを除いて、これらの二つの形を導く方法は最も自然の様に思います。前者では、もしも幾らかでも全てでも一つでもあるXが、同時にAとBであったなら、AとBは時々一致します。あるいは所謂幾らかのAはBになると結論付けることになります。全てであったり幾らかであったり、そうであったりなかったりする諸形式のために、それらを全て再発見するために有効に働きますが、注意しないことは決してありません。

これらの変化の原理を発見するのは難しくありません。理解力は同一の思想を二つの様式の前であったり、あるいは別の言葉で見分けなければなりませんし、対象を見ること無く書かれた思想から、別の書かれた思想を引出すことは許されないことです。従って、同一性の原則は少なくとも明確な言葉に基づいて働きかけて、認識を広げたいと願う弁証家への警告として、論理学の研究において自らの原理そのものに見えます。以上は、些か不毛な研究の報いです。全く厳密に研究を行えば、その報いは知覚も無く理性の働きが進んで行き、どんな理性の働きも確かに幾つもの誤りを閉じ込めることを良く示しています。これらの全ての誤りは大変自然なものであり、対象への考察による言葉の意味をだんだんと豊かにすることから生じますが、そのことは言うことも無く、知ることさえもありません。(完)

ところで、この章では学校という茂みへ狩りをしに行くことにします。植物の様な言葉は二つの方法によって理解されます。あるいは、その言葉が適する沢山の生物のことを意味する様に、換言すれば一つの集合です。それ故に、延長として理解されます。あるいは定義に結び付いているかの様です。例えば、植物とは種子によって繁殖し、空气中的炭素を葉緑素によって固定させる生物です。その時は内包的なものに理解されます。不思議なことは、三段論法も一つの体系であり、あるいはもう一つの体系に倣って二つに読めることです。延長において、もしも羨望する人に見える人々は誰もが幸福な人々に入らないとすると、そしてもしも全ての虚栄心の強い人々は羨望する人々に入るとすると、虚栄心の強い人々は幸福な人々に入らないと結論付けなければなりません。これはまさに、一方の円がもう一方の他方の円の中に含まれるか、一方が他方の外にある円で表されます。羨望する人々の集合は虚栄心の強い人々の集合の全てを含み、幸福な人々の円の外にあるのです。内包的には全てが別ものになります。二等辺三角形の定義により、もしも二つの角が等しければ必然的な結果になります。もしも円の中心にあるどんな三角形も必然的に二等辺になるとすると、その様な三角形はどんなものでも必然的に二つの角が等しい結果になります。あるいは更に、もしも幸福が常に必然的に賢明の属性であるなら、そしてもしも賢明が人間の属性になり得るなら、その結果は幸福も又人間のものになり得ます。これらの関係を図にするためには円で描くことが出来ますが、或る性質を含めるか除くのか、その時は定義になるのですから、全く別なやり方で難無く理解する様に集めて描くことが出来ます。幾らかや全てが、可能性や必然性の代わりになります。一方か他方かの読み方をしても、三段論法は同じ速度で進みます。通俗的なものと体系的なものとははっきりと区別されるのと同じで、思考するにも二つの方法がある様に、一方は沢山の事例から証拠を引出しますし、他方は観念から引出します。それは更に論理学とか修辞学が、事物にも調査にも触れずに単に言い方に関係しているだけのしるしなのです。

三段論法の第三の形は、それらの形を比較するなら、同一の道に導かれます。何故なら、前者の二つは結合された二つの仮説を発展させるために、理論的な証明の表現に適しているからです。第三の形は、常に事例によって証明するので、全く違って来ます。従って、その結論は決して普遍的でないに気付くことが出来ます。理解力とか延長の中でそれらの両方を読むことが出来るので、論理学は諸方法を含まず、精々何らかの反映を与えるだけであるのが分かります。かくして第三の形において主語又は事物は中間項であり、結論の中では消えて仕舞います。世俗の思想、取分け数々の事例の蓄積によって強い印象を与えられた思想が、個別の存在を把握する代わりに数々の公式に達します。その代わりに前者の二つにおける主語は、換言すれば事物が、結論の実際的主語になります。二つの等しい角を持つ或る三角形があります。そこには二つの角がありますが、他の色々な性質によって必然的にそこで先ず認められたことです。そして、一つの場所が問題であるとするなら、もう一度言われるでしょうが、用心することです。この場所では二等辺三角形である範囲内で、同様に二つの等しい角を持っていて、誤りもそこに関連して来ます。従って、真の科学は自然の事物を近似法で把握します。つまり多くの誤りを制限しますが、世俗の考えは沢山の経験で一種の確率に達します。蓄積によるこの証明は屢々帰納法と呼ばれてい

ます。体系的探究においては十分に考察しないで、理論が大変入念に枠内に納めるや否や、唯一の経験からでも証明します。その時に経験が何回も繰返されるならば、それは証明を強固にするよりも寧ろ知覚を最良にするためです。さて、殆ど錯綜した茂みの中にいて少なくとも標注だけを立てるには、これ以上は先へ這入らないことにしましょう。私が注意を与えるのは、少なくとも諸原因を疑わずに成功を考える盲目的な確率と、トランプ遊びや骰子二つとタンブラーの骰子遊びやルーレットの様な機械的に定められたルールでそれらの結果が負わされる確率とがあることです。少し何でもここで話をして仕舞い、謝ります。〈注釈〉に関しては不足だらけです。

(完)

幾何学は、経験という諸対象の間の距離と大きさの関係の確立を目指す諸形式の明細目録です。その法則は最も単純な形から出発して、だんだんとそれらの形を複雑にする処にあります。この成功には次の様な、同等とか相似の三角形で解決出来ない幾何学的に問題になるものは少しもありません。定められた形として最も単純の或る三角形とは、最も単純な線が直線である様なものです。そして、三角形とは三本の直線で囲まれた軸上に全てが描かれたものであり、曲線は決してありません。これらの三角形は先ず点と線であり、これと同時に距離と方向です。そして次には二つの運動の区別があります。その運動は、一本の直線に沿う長さのものと、固定された一点の周りを回転する直線のものです。そこから角度と円が生まれますが、それらは一つしか生みません。そこから出発して探究の二つの秩序が発展します。一つは、平面の図形であり、表面の線に関係したものであり、最後には体積に関係したものになります。もう一つは、サインやタンジェントの様にきちんと選択された直線の角度とそれらに関係したものです。最後の征服は曲線のものになります。数々の円錐体がそれらの主要なものになります。

認識の目的が認識自体にあるというのは、大変に古い偏見です。そして教育は多分必然的な結果として、図形以外には何も探究しない学問の一つの外観を幾何学に与えています。それ故に私たちが確かな印象を得て、他の印象から離れるために行わなければならない運動を予想するのを目指して、認識は事物そのもの以外に他の対象を持っていないことを繰返し言わなければなりません。従って幾何学は方向と測量と体積計算を目的と見做しております。その応用は科学全体の領域を覆っています。そして、コントが気付かせてくれた様に、私たちがそこで用いる主要な策略は、線を測るのを最小にして、あり得るかも知れない最も可能な角度を測ることで、それが大きな予測を築きます。いずれにしても数々の事物を、現実の形に近付ける直線と曲線の網の中に捉えることが重要です。読者は既に十分にお分かりになったことと思いますが、現実の形とは更にこの網そのものによる形以外には無いのです。

これらの指摘によって、今では定理の古典的問題に作為的困難も無く取組むことが可能です。もしも曖昧でない命題の形で何らかの新データが与えられなければ、論理学そのものの幾何学的な理性の働きは、遠くへ行くことがないのが分かります。それは常に何らかの新しい図形であり、そして言語の中で古いものと明確なものとの結合によって取得されます。幾何学が対象無しでは済まないことを既に十分に分かせてくれます。ところが著作者たちは、定理とか要求を既に認めていて、それらが無ければそれ以上前へ進められないのです。知覚に関する十分な研究は、これらの定理が更に定義でもあることを示すのを可能にしています。紙上に描かれた想像上の対象を、真実として存在する精神の形式からどちらが真の幾何学として扱うのか、少なくとも良く識別しなければなりません。従って直線とは、一点から他の点へ絶えず向かう運動によって最も良く定義されます。その様に直線とは方向そのものです。しかし著作者たちは、最短距離も直線の本質であると求め、定理として提起したがついています。しかしながら方向とは何であるのかを考えてみましょう。それは先ず、私たちと近寄れないで離れている事物との間の直接的関係です。これは予測した言い方です。粗雑な図形によらないで、想像力によって決して騙されない儘でいるなら、二点間には一つの方角しかないということが定義そのものから生じます。というのも

、二つの方向を区別するには、少なくとも二つの方向の間を考えなければなりませんから、それは少なくともその関係が二点の間にあるので定義に反することになるでしょう。二つの同一の点を通る二本の直線とは、観念上は一本になるしかありません。従って描かれた観念も決して混同しないことだけが重要です。直線とは一点から別の点までの最短の道であるとしてつけ加えて言う時も、恐らく間違った言い方をしているのです。何故なら、この世には人が望むのと同じ位に数々の道があるからです。しかし、一点から別の点までには、他の点を何も考えなければ一本の直線しかない様に、一つの距離しかありません。二点の間のその直線は、二点の間の距離そのものであり、最早その距離は常に同一方向に従う一点の運動以上には短くなり得ません。あるいは又、もっと短い距離が直線上で、もっと近い一点を決定するのも知れません。これらの様々な距離は、同一の直線上でしか決して比較されません。従ってもしも、もう一つ別の距離がもっと短くなっていったなら、それは数々の点の中の一点を別の点とは結び付けないことを意味しますし、それ以外の意味は持てない筈です。

しかし、直線のこの特性は直線それ自体の様に、経験が無ければ考えられる筈が無いことも同様に十分注意しましょう。もしもそこに対象、つまり感じ易い多様性が少しも無いならば、直線とは最早何ものでもありません。従って幾何学者は、少なくとも暗黙の約束という数々のしるしによって、色々な点を区別しながら、十分な多様性を与えられていて、嘘つきになることは最も少ないのです。その点そのものは、少なくとも距離によってもう一つ別の異なった事物です。大きさも形も注意しない条件ならば、大きな斑点も小さな斑点もまさに同じです。もしも注意したなら、各々の斑点が幾つもの対象になって一つではなくなります。かくして幾何学者は意志によって言葉に曖昧ではない意味を力説して、諸外観と戦います。

唯一の直線が距離を限定する様に、唯一の平行線は回転を限定します。もしも数々の直線がこの世で探究すべき事物であったなら、与えられた一点による直線には一つの平行線しかないかどうか自問するかも知れません。しかし直線とは設けられて保持されているものです。一点の周りを一本の直線を回転させて下さい。もう一本の直線と共に、どんな角度も作るのが可能ですし、ゼロ角度も含みます。それでは何故ゼロ角度が、例えば半角度の角度を作らない様に、直角の位置を限定しないと認められるのでしょうか。半角度という角度は、二本の直線を限定していることを何に対しても言われるでしょう。そうです、粗雑な想像力にとっては二本ですが、如何なる曖昧さも無い多量の回転を描きたくなると、申し分なくそれを行う型に嵌まった一つの方向でそれらの角度を測るならば、二つになりません。それでは何故その時に、ゼロ角度に幾つもの角度があると認めるのでしょうか。角度がゼロになる時、あなたは最早右や左を通るものを知らないとは私は理解します。だが、あなたの旅は遠くへ来過ぎています。勿論、旅が重要ではありません。あなたが言ったことに従う以外に何も済ませません。図面と観念を混同しないで下さい。その上、幾つもの平行線があると言っても少しも構わないのです。そして、人々は非ユークリッド幾何学において、少しも矛盾を見出すことなくそれを試みて来ました。そして、私もそれを正しいと思っています。人々が矛盾としていること以外に、その話には矛盾がありません。諸事物は何も言いませんし、反対もしません。更にその上、この幾何学は把握すべき対象を発見する限りは、それで良いのです。そうでなければ、遊戯でしかありません。（完）

力学に関して何か言わなければなりません。それは一般的に幾何学から経験へ応用することの最初のものと考えられています。その中で忘れられるのは、幾何学と代数学でさえも算数と同じ様に、そして全ての科学と同じ様に自然に関する学問であることです。しかし力学については、もっと明白でもあります。それ故に単純なものから出発して、再建の方法をここで示さなければなりません。私は、良く知られて有名ですが、大変に顕著な事例を考えたいと思います。私は石を垂直に空中へ投げます。石は同一の線に従って再降下します。起きたことを正確に描写しても問題はありません。それから純粋な力学に従って次の様にしてみます。私の事例が簡潔になってつけ加えるものが無いために、空気抵抗を単に無視してみます。私はまず最初に、秒速二〇メートルの速度で上方への運動を石に伝えました。この石は単に力が加えられることが否定される慣性によって、常にこの速度で何処までも真っ直ぐ進むでしょう。よろしい。ところが全ての物体は落下します。石のこの運動も、地球の近くにあるどんな自由な物体とも同様に、落下するのを決して妨げません。石は落下します。それが意味するのは、石が最初の一秒で約五メートル加速した運動を垂直に進めることです。従って二〇メートル上昇したのと同時に五メートル落下しました。つまり空中には一五メートルの処にあります。二秒後には何時も進んでいるのが二〇メートルの速度ですから三五メートルの処にあるのですが、二秒目の間には同時に約一五メートル落下しました。単に合計すると空中には二〇メートルの処にあります。この分析を続けて行って下さい。石は落下して、最後には地面にぶつかることがお分かりになるでしょう。それが運動の終わりになります。私は運動の構成原理を明らかにするために、他の色々な事例にも絶対的に行うべきものとして大変に単純なこの事例を厳格で逆説的に分析しましたが、はっきりお分かりになる様に、この原理は経験が暗示するものではなく反対に、経験とか対象の状態にある外観を見ないことです。そして、もしも空気抵抗が無視されたなら、同じことを繰返し言うのをお許し頂ければ、加速された力としてその運動の反対方向に向けて導き入れる助けになることが良くお分かりになると思います。砲弾の運動も同じ様に分析しますし、惑星の運動も同様です。

ここでもう一度、運動の構成に関する良い事例を思い出したいと思います。それはデカルトによるものであり、その後は専門の批評家たちに委ねられ、科学と考察が別々の二つの事柄であると理解させてくれるものです。ところでデカルトは玉突きの玉を弾性のあるものと仮定して、固い平面にぶつかる運動を分析しました。私は諸定義をその儘に置き忘れるとして、先ず初めに最も単純な場合を調べます。玉は普通に平面上に落下します。玉は同じ軌道をはね返ります。というのも定義によって、自然の周りでは全てが同等であるからです。しかし次は大胆な分析です。私は斜めに玉を投げます。私がこの運動を考えるには、一つは面に垂直に、もう一つは平行に、二つの運動を玉が同時に行っている結果として考えたいと思います。前者は通常なら玉が垂直にはね返ります。後者は障害も無く進み続けます。単純な構成によって分かるのは、入射角と反射角が等しいことです。大胆なこの分析を前にした脆弱な精神の人々の恐怖を、これ以上はっきりと明らかにしているものは何もありません。彼らは面が何であるのか、面に斜めにぶつかることは何ものでもなく、面は垂直の方に定めているとしか理解しませんでした。従ってこの分析は、玉突きの遊びが与える想像上の証明を排している観念を保持することしか行いませんでした。以

上から分かるのは、判断力には厳格さがあり、それ無くしては精神が全ての対象を自ら秩序立てる高度な分析へ向かう真の道は決して無いことです。

労働の観念も又、単純な観念の一つです。その観念は正確さを現した観察者のタレスが如何なる人であったのかを正確に知ることなく、現代力学を照らしていました。バケツ一杯の水が一メートル高くしたこと、これは一つの労働です。バケツ二杯の水が一メートル高くしたなら、二倍の重さを制しなければなりません。しかし私がバケツ一杯の水で二メートル高くするなら、そこにも又、二倍の労働があります。そこから労働のこの単位に従って、バケツ一杯の水が一メートル高くするという観念は、バケツ十杯で十五メートル高くする労働では長さに対する重さとか力を、増すことで得られることになります。そして、もしも全てのバケツの水が何の邪魔物も無く落下するなら、それらの地面への衝撃はその労働自体を測定することになり、その時は激しい力を引起こします。しかし、ここにはもっと驚くべき応用が沢山あります。一般的には固体が運動を与えられると、全体部分が同一の速度で進みます。それは平行移動でしかありません。しかし、物体の一点を固定すると回転するでしょうし、その中で全ての部分が同時に同一の道を進まないのは明白です。その様なものが梃子であり、車輪です。巻揚機の中に備え付けられている複数の滑車も、他の部分よりも速く運動します。それから水圧機も同じです。機械と呼ばれるこれらの装置は、それを動かすために費やされる労働とは別の労働になり得ませんし、あらゆる場合に  $FL = F'L'$  と書かれます。そこから次に起こるのは、それらの労働の間で色々な力が逆に走り回る道の様にもなることです。従って私は、歯車を付けた起重機とか水圧機が如何にして運動を伝えるのかを、少なくとも見詰めること無く一度にその力を把握します。しかし、滑車や歯車が梃子になるとか圧力になるための各々の場合における分析は、殆ど機械的な活動よりも精神をより一層良く明るく照らしていることを私は認めます。そして、この事例は理性を働かすための驚くべき機械である代数学へ私たちを導きます。(完)

ここで定め様とする目的にとって、これらの二つの学問を区別する必要はありませんし、その広がりや深さを述べる必要もありません。事物の学問として単に再び考察しなければならないだけです。良く知覚された対象の中で、自然の素晴らしさと同様に計算者自身にとっても、屢々驚くべきものである解答となる変換の組合わせの源泉を常に探究しなければならないだけです。実際にここでは共通した一般の知覚においては不可能な経験である、数字についての経験しか問題にしません。

多数が整理されていないなら、直ぐに精神を悩ませます。そして、整理とはどんなものでも幾何学的なものです。兵士一人一人にパンを一個ずつ配ることも既に数えることであり、機械的なものです。人々と彼らの前のパンの数を整理しながら調べることは、既に相等の関係を考えることです。しかし、最も単純な職業も観察者にとっては、最も都合が良い対象である集合を課しています。園芸は一つの法則に従った距離と列に合わせますし、そこでは理解力が、二つの要因から生まれるものの諸法則を読み取ることが出来ます。他の色々な箱を詰めて整理された数々の箱や砲弾の山は、もっと遠くへ導きます。子供の数え玉や積み木遊びを無視してはなりません。理解力は、事物を良く知覚する限り、ここで純然たる数の関数を発見します。例えば、立体の一辺を二倍にすると当初の立体を八倍にすることになるのが分かれば、それは一列に並べた立方体の数量や積み重ねた立方体そのものの形の相等性を見分けることでもあります。大変に小さな始まりから大変に広い学問に出掛けることを恐れる人々は、対象への知覚の中での理解力の仕事を十分に把握しませんでした。子供の羊飼いで知覚された大空においては、最早混乱はありません。この立方体においては、二掛ける二に対して未だ三足す一にならなかつた子供によって、知覚された立方体でもあるからです。

これらの余りに単純な見方に対しての代数学者たちの強力な反発と、対象への如何なる表象も無いこれらの最初の命題を証明するための努力は、自然と生じます。数字や文字や記号がペンによって分配され、並べられ、置き換えられる対象でもあることを忘れるから、それ以外に彼らの仕事が成功することはないのです。そして代数学のどんな力もまさしく、これらの象徴を取扱うことによって事物そのものへの考察に代わることからやって来ます。その象徴の最終的配置は一般言語に翻訳され、その上、より一層自然な方法によって骨が折れて屢々不可能でもある解決をついに与えます。代数学によって扱われる算術に関する学校での問題は、機械的な計算の観念を余りに与えるでしょう。この観念は理解力の働きを紙上の象徴の配置を見分けることに帰しますが、決して大胆には変えないことに帰します。例えば、或る言葉を一つの要素からもう一つの要素へ移動させても、その記号を変えることをしないのです。

私はここで、これら的大変に単純な関係を再発見するために読者をご案内しますが、それらの関係は所謂ニュートンの二項定理として良く知られている公式の展開においては沢山の組合せがあって並外れています。そこでは取分け、並列された象徴の  $a$ 、 $b$  に関連して象徴の  $c$  のために三つの場所がありますが、少なくとも三つの場所があることが分かる単純な諸集合によって常に結合が如何にして計算されているのかが分かります。しかし、取分け  $a + b$  の和の自乗項を幾つか形あるものにする、代数学者によって準備された経験の中で、その様なものとして対象の

機能を推測させてくれる指数の連続した法則や、係数の対称が現れて来るのが分かります。行列式は、これらの計算を吟味するのに適した素朴な形への復帰の顕著な事例を、恐らくはもっと与えるに違いありません。しかし、これらの関係は代数学の至る所にありますし、注意されるや否や大変に驚かされます。幾何学の曲線が再び試みられない結果を屢々提供するまで、物質的な諸関係を表すことが出来るので、代数学も従って幾何学や全ての事物を表せます。しかし、単純であればある程、読み易くなりますけれども、同一種類の関係によってそれらは不自然に集合されますし、ペンによって整理された色々な対象の関係で、それらの中では従って驚きも雷雨も響き渡っています。（完）

数学は何時も大きな希望を人間の精神に抱かせました。理性の働きによって経験に先行することが出来たり、所謂計り知れない大きさに這入る様に、それらの関係を大変正確な数字で発見することさえも出来るのは明白でしたので、思考する力が諸感覚が知覚するものよりも遙か遠くへ広がって行くことも又明白でした。それに加えて真の哲学は、常に何らかの理由があって大変に強く、諸感覚に対して用心させるに至りましたし、或る別の判断への決断を呼び寄せるに至りました。同様に既にお分かりになった様に、常に抽象的なメカニズムに還元する物質は、まさに自ら判断することも自分自身を理解することも出来ませんでした。結局のところ、正義や自由や友情という誰もが経験の中では決して出会うことのない道徳的秩序に関する研究は、それでも何時も結果に注意している諺の知恵よりももっと尊くて堅固な何ものかを含んでいる様に見えます。そこには抽象的な理性の働きを、決して予め軽蔑しないための理由が一つならずあります。しかし、論理的な外観にはそれ以上の何ものかがありますし、そのために過度に愛される結果になります。

情熱の研究に未だ入らなくても、素朴な経験が純化された経験とは似ても似つかないことを理解することは出来ます。非常に驚くべき思い出を残し、更に作られた話で完全なものにする夢の数々は、肉体から離れた旅や復活や幽霊のことを表します。それらは情熱が大変良く吟味する前兆を別にしても、欲望と祈りが単純な道具や機械よりも力を持っていた無秩序な世界の観念を人々に与えていたに違いありませんし、実際に与えていたのです。そして、説得や単純な断言でさえも気分や気紛れに対しては大きく動かされたので、同様に運命についての予言も動かされたので、言葉の一致と不一致も常に揺れ動くことを知っていました。音の響きさえも大変見事な響きを残して、更に私たちの期待に応えてくれたり疑念を拭ってくれる様に見えます。詩の律動や歌も、取分け大勢の人々の時は、言葉の普通の意味が望んでいない様な多くの深い意味を私たちに目覚めさせてくれます。そこからやって来るのは、大変見事に数々の証拠を与えてくれる詩と雄弁です。しかし言葉の戯れや、或る意味では期待している思いがけない意外な返事も、結局のところ精神とか表現法と呼ばれているものであり、最も緻密な議論においても又多く持っていますが、人は敢えて口に出して言うことさえもありません。その時、これらの論理の閃き、垣間見られた諸形式、模倣と対称、全ての宗教の最初の装飾、あらゆる神学の最初の草稿のことを何と云うのでしょうか。プラトンの本の中の詭弁家たちが大変上手に私たちに観念を与えている、より一層緻密なこの音楽に意味を貪る様に求めるためには、ここで判断力と情熱の全てが結び付きます。そして更に厳格な文体は、その驚きによってもっと感動させる何ものかを保存しています。そうです、形式が剥き出しで裸になればなる程、言葉の関係は感動するものになります。

或る人の肖像画は本人に似ています。もしもあなたが肖像画を殴れば、似ていますからその人を傷付けることになります。王の剣は、剣の中の女王でもあります。ゲーテがメフィストフェレスに次の様に言わせたのも偶然ではありません。「葡萄酒は葡萄の実から生まれ、葡萄の実は葡萄の樹から生まれる。よって、樹は葡萄酒を産み出すことが出来る」。これは、あらゆる呪文の主題です。習慣への信仰は寧ろ動物たちのものです。人間のものは話された証明です。未開人たちの奇妙な迷信は、全てが大変良く研究されていますが、慌ただしく帰納されたものに似ている

と言うよりも寧ろ抽象的で演繹的な神学に似ています。どんな魔法も弁証法の一つです。それ故にどんな弁証法も又、魔法であるとしても驚いてはいけません。私は永遠の苦悩に関しての古い論拠を昨日読みましたが、それは神が永遠であるなら罪も又永遠で、従って苦悩も永遠でなければならないというものです。この表現は一つならず多くの議論を終わりにしましたが、言葉の遊びに過ぎません。この考えに従って行つて言えるとするなら、神の体刑は私たちの罪を救済するためでなければならなかったと思われまふ。これらは無邪気な方程式です。例えその考えに価値があるとしても、そこにあるのは馬鹿げた証明です。しかし、それらの証明は面白いのです。被害者と同じ苦痛を罪人に科す反座の刑は、一人ならずの理性に基づいて設けられましたが、先ずは罪 (crime) と苦悩 (peine) が類似して一致することで納得したからです。そして、音声的にも反復される様であったからです。理性的に考えることも屢々韻文を書くのと同じです。

以上のことに基ついて形而上学とか神学の表題の元に最も豊かで感動的で何よりも曖昧な言葉を現す様にさせて、まさに最良へと導く理性の働きと言えぬ力を熟考することです。このことに対しては、純粋な論理学の正確な研究と、数学者の諸証明についての注意深い考察が最良の用心になります。何故なら、少し微妙な議論の弱点を発見するには、先ずは性急ではいけません。寧ろ全ての議論に反対して、理性的な偏見でも養いましょう。しかし、それでもそれらの原理を吟味するのを目指して、幾らかでも調べるのは無駄ではありません。(完)

或る神学者から理解したというヒューム(1)に、私は諸原因についての見事な理性の働きを発見しました。それは全てのものには原因があることを証明するのが重要であるというものです。そして次は、如何にして神学者が推論するかです。或る物は存在するが、決して原因が無いと仮定しましょう。それは従って無から生じます。そして無とは何ものでもないことであり、何も生めないことです。しかし、決して原因を持たない事物がその時に無から生じると仮定することは、まさしくどんなものでも他の事物から生じるに至ることを仮定する、とヒュームは言います。でも、それがまさしく問題なのです。無邪気な聴衆であるなら、何も生めない無に関する議論によって、その注意力はその仮定から逸脱させられる、と私はつけ加えて言います。この言い方は他の言い方よりも良いと私には思われません。というのも、私は無から如何なる種類の観念を持ちませんし、何も考えないからです。無から私はどうして何かを言えるのでしょうか。ところが言葉は何でも言えます。もしもきちんと建てたいなら、偉大な破壊者が人々にとって最も有益であることを確信するためにヒュームを読むことが出来ます。想像力がどんな風にも全てのイメージを結び付けることが出来る重要な考察をそこに私は発見しましたが、それは機械が思想から宇宙のイメージまでの鎖を生み出す英国風の小さな諸体系を遠ざけます。あなたは恐らくこれまでの原因についてや、支えるのが大変困難な哲学者の仲介者の位置について良く把握するのでしょうか、カントの読者になるには始めは大変に骨が折れるものです。というのも、物理学者たちのメカニズムはそれでも何らかの方法で設立されなくてはならないからです。従って前述した神学者は推論が下手ですけれども、結論を下すのは上手です。経験における事物のあらゆる状態は、法則に従ったその前の状態が変化したものです。しかし、この関連が無いなら、連続した経験も決してありませんが、それでもどんな経験からも外れていると、何ものでもなくなります。純粋な論理学とか修辞学は、この関連を確立するために何も出来ません。

第一原因に関する有名な議論を乗り越えたいと思うなら、これらの考察はじっくり考えるためにも無駄ではありません。厳密な論理をとことん押し進めたいなら、大いに堂々としてその中で態度を強く表明しなければならなかったのです。ここにあるのは議論です。事物の状態は、もしも別の状態がそれに先行していなかったなら、存在することは出来なかったでしょう。そして、もしも更に別の状態がその状態に先行することが出来なかったとしても、存在することが出来なかったでしょう。その様になって際限が無くなります。よろしい。しかし、事物の或る状態が存在する以上、それらの全ての存在条件は与えられるか与えられたのですが、この全ての、ということに注意してください。事物の存在自体によって勘定が行われて完了し、けりが付きます。それ故に、それらの条件が無限であることは肯定することと否定することを同時に言うことであり、それは未完であることを意味します。一つの原因の前にもう一つ別の原因があるという観念は、その様にして終わりが無く、従って十分でなくなります。現代の無限とか、実現された無限とは矛盾を孕んでいることを言っているのですが、人々は同じ様に説明が付くことなのです。それ故に一つの原因とは、原因の無い原因そのもの、つまり最初の原因であり一連の条件を終わりにするものでなければなりません。というのも結局のところ、現在の状態が存在していて、それらは待っていてくれません。それと共に十分な原因に達します。そこから出発して唯一の神聖

なものとしての、原因の無い原因を認めるにしろ、自由になって原因にならない原因のために、そして道徳が望む様に恐らく多様な原因のために単純にその場所を用意するにしろ、数々の結論が相関的に繋がります。しかし、それらの結果には触れないで置きましょう。その議論を見てみましょう。

第一に注意することは、原因の無い原因そのものに達したけれど、全てのものには原因があるという原理から、この原理を否定するに至ったことです。ここには何らかの言葉の罣がある証拠になります。第二には、もしも変化の表象に原因との関係を取得したなら、続く事物の状態が直ぐに先行する状態から生じることに気付きます。従ってそれは人が望んでいるもう一つの近接するものです。換言するなら惑星の体系に見る様に、変化の中には継続があり、そこでは極めて明瞭にこれらの物体の状態はどんなものでも引付けられて、限りなく近接するもう一つの状態に依存していて、それがもう一つ別のものに近接したものになります。ここでは言葉が私たちに騙す様なものであるのを見て下さい。私は一つの状態と、もう一つの状態を言っているのですが、両者の間に私が望む限り相違を見出すことになるでしょう。私が全ての原因を語っても、それ故に沢山の原因を理解していません。そして最早数え切れなくなると、現在の無限という論理的不可能も消え失せます。最も小さな間隙にも、私が望む限りの多くの原因が這入り込みます。しかし、私が原因のその数を数えるなら、それは数える私の外にはありません。自然を把握しようとしても、私の計算において罣に陥るのは私自身です。第三には、数の形成が最早考えられなくなると、無限という言葉の中には殆ど恐ろしく曖昧なものがあります。何故なら、未完成で不完全なものと同様に、完成して完全なものも指し示しているからです。従って無限の生成は、無限が全てに充足するから事物を説明するのに十分であると私は良く言えるでしょう。しかし言葉は何ものも充足しません。

無限が最早過去に形成されずに、現在では事物を支えていることに関してライブニッツはもっと感動的な形而上学的な議論を残しました。合成されたものは合成されたものが無いなら存在することは無い、と彼は言っています。もしも、これらの合成されたものが合成されたもの自体であるなら、他の合成されたものへ投げ返されます。かくして終わりがありません。しかし、もしも合成されたものが存在するなら、それが合成されたものも今直ぐにでも存在します。それ故にそれらは単一ですが、絶対的に単一なのです。それらは精神です。これ以上に論理の働きが見事なものでも何も生みませんでした。しかしながら、如何にして単一の合成されたものが、他の働きでしかないものである大きさと一緒に与えられることが出来るのかを尋ねることはありません。私が単に気付くのは、もし論理的に言いたいなら、事物はまさに実際には合成されたものでも単一のものでもあり得ないことです。というのも、このジレンマは私たちのものでもあるからです。そして、言語が自然と同じに豊かであることは証明されませんし、本当らしくもないからです。知覚の無い理性の働きに関して読者に疑念を抱かせるには、全く以上で十分です。この用心は、望むものを大変上手く証明する情熱に備えるものなのです。（完）

(1) ヒューム（一七一―一七七六）は、英国の哲学者・歴史家で経験論に基づいた。

ここでは明確でない学問を論じなければなりません。何故なら、あらゆる部分が弁証法的であるからです。魂や死後の生命を論じる一方の人は、まさにはっきりと形而上学的です。もう一方の人は、経験に基づいて私たちの思想や感情に関して論じて、おまけに信じられない程の沢山の言葉に支配されています。

〈私〉という言葉はあらゆる思想の主体であり、現れたり隠れたりします。私が現在とか過去とか未来とかについて描こうとしたり作ろうとしたりして試みることは何でも、私が常に形づくったり所有したりする自己の思想であり、それと同時に私が感受している感情です。〈私〉というこの些細な言葉は、私の全ての思想の中で不変です。私は変わり、歳を取り、諦めたり、考えを変えたりします。でも、これらの諸命題の主体は常に同一の自己です。命題とはその様なものです。私が最早自己でなく、他者であれば命題そのものが自壊します。同様に命題もいい加減になります。すると私は二人になります。というのも私が不変であるのは全く異論の余地が無いからです。大変に自然なこの論理によるなら、私が存在しないという命題は不可能になります。そこで私は言葉の力によっても不滅になります。以上は魂が不滅であることを証明する議論の背景です。それは変わらない〈私〉が常に同一であることを、生涯に亘って私たちに再発見させてくれる所謂経験の原文です。従って〈私〉というこの些細な言葉は、大変上手に私の肉体と行為を示します。そして両者を他の人々やその他のものから大変きれいに分離しますし、自分自身に反対したくなったり、自分自身から分離したくなったり、自分の葬儀に参列したくなったりすると、弁証法の源泉になります。

人間のこの永遠性という観念は、全ての変化と不幸を超えた同一性のものと同じに、実を言うとして道徳秩序の判断であり、恐らく最も見事なものです。同一性の純粋な形は、私たちの思考が思想になることであると私はつけ加えて言います。というのも、自己を認識しなければ何も認識出来ないし、自らを継続させなければ、知覚された運動でしかない時は何も継続させることが出来ないからです。しかし、あらゆる思想の主体であるこの〈私〉は、常に一つである理解力の別名でしかなく、常に唯一の経験の中に全ての外観を読んでいることをこの考察は理解させてくれます。そこでこの探究は中断します。何故なら、私が分離された二つの世界を知覚すると仮定すれば、私が二人であることを仮定することであり、それでは不条理で全てが終焉するからです。少なくとも言葉に注意しない人々は、手応えがなくて唯一であり永続性があるって変わることがない事物と、結局のところ所謂物質と、実際に面と向かっていると自ら信じます。そこには次の様な公式があります。私は私自身のことしか思い出さないと云うが、それらには単純な同一性があります。私は思い出す、と言えは十分であるからです。ここでは言葉が余りに良く役立ちますので、熟考によって成功を過信します。でも、対象が欠いています。そして思想は最早支えになりません。熟考の条件の一つは、対象を支えて自分の作品に思想を見出さなければならないことです。しかし、この条件は良く隠されています。最初の運動は自分の裡に引き籠もることにあります。そこでは言葉しか発見されません。それ故に私には自分の認識についての章はありません。この本の全体がそれに役立っているのですが、それは揺れる水面に自らを見る様に、間接的な道であったり、顔を近づけたり、閃光の様に瞬間的であったりします。私たちが一番興味ある問

題は、一番単純なものではありません。残念ですが仕方ありません。〈私〉が決して変わらないにも拘わらず、自分であり続けることは些細な仕事ではありません。

ここで特に注意することは、所謂実験心理学と生理学的心理学が全て脆弱な骨組みに結び付いていたことです。恐らく実験心理学以上に間違った知識もありません。「自己とは意識状態の集まりでしかない」というヒュームの公式は、破壊するのに大変強力でしたが、再建する時には単純過ぎた精神の限界を見せています。何故なら、意識状態が事物の様に動き回るのか、とは言われないからです。誤って言われているこの経験主義は、細部に至るまで弁証法的です。ヒュームは、所謂石もナイフも果実も、感覚や想像力や記憶であると言います。そして、これを全て上手に縫い上げた精神をあなたに組立てます。しかし、上手だろうと下手だろうと縫い上げた精神というものは決して存在しません。奥深くて世に知られていない人物だったラニョーは、神が存在しないことを証明するのに心を砕きました。というのも存在することとは経験という織物の中で、他の事物と共に捕らえられることである、とラニョーは言っていたからです。私の中や周り全体を思考することに関して、世界が広がろうとするのと同じく遠くまで何を言うのでしょうか。それは把握することであって、決して把握されることではありません。いずれにしても巧妙なメカニズムは蟻の様に上手に移動させることが出来ますが、思考することはありません。況して、この機械の色々な部分が知覚や記憶や感情であるとは言えません。知覚というものは、世界と同じ次元を持っていて至る所で、感情になり記憶になり予測になります。その思想は最早自己の外にも内にもありません。というのも自己の外も又、思考されるからですし、自己の外も内も常に一緒に思考されるものであるからです。

この次にあなたは、私たちの中の長いリボンの様な自己の本質を組立て直す言葉の働きを、情け容赦無く判断するでしょう。そして更にあなたは、記憶のための一つの整理棚と、想像力のためのもう一つの整理棚と、幻想のための一つの整理棚等々を探しに行き、そしてそれに倣って曖昧な経験を解釈する精神の生理学をもっと厳格に判断するでしょう。少しも複雑ではない諸学問の事例によって、どんな困難でも事実で構成していることは余りに明らかです。思考する脳には、その様にして思考する魂と、そのイメージに倣った範が与えられます。そして、この見事な仕事は、もしも交霊術者たちがより巧妙であったなら、私たちを旅する魂に還元します。しかし、この幾何学を無くした唯物論には触れないで置きましょう。（完）

アラン

精神と情熱とに関する八十一章（上）

<http://p.booklog.jp/book/122918>

翻訳：高村 昌憲

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122918>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト